

頼み込んで人妻教師とコスプレH！

木森山水道（夜山の休憩所）

「ご挨拶」

この度は、ご購入＆ご鑑賞いただき誠に有難うございます。
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」

体験版には文章と挿絵の全てが収録されておりますが、
製品版には次に挙げるおまけ要素が追加されます。

- ・挿絵に使用した全CG（17枚分）のデータを同梱。
（サイズは1024×768。形式はPNG）
- ・挿絵を纏めたPDFデータを同梱。

「ご注意ください」

- ・PDF閲覧ソフト（Adobe Reader 7と9と で確認済み）によっては「見開き」で見ると、ページが右から左へ進みます。
- ・本製品はフィクションです。また、個人の範囲でお楽しみ下さい。

目次

第一話	頼み込んで女教師姿で！	3
第二話	頼み込んでブルマ姿で！	37
第三話	頼み込んでセーラー服姿で！	75
第四話	頼み込んでスク水姿で！	111
最終話	アリバイ作りのおしかけエッチ	144

主な登場人物

柊 夏子 (ひいらぎ なつこ) 三十二歳。善良な人妻教師。

戸部 渡 (とべ わたる) 学園生。童顔で大人しい性格。夏子に想いを寄せている。

第一話 頼み込んで女教師姿で！

新学期が始まって少し過ぎた頃の放課後。

外は澄み渡り、爽やかな風が草木の心地いい匂いを運んでいる。

窓からグラウンドを見下ろせば、体育会系の部員たちが威勢よく練習に励んでいる光景が広がっていた。

「ねえ、悩み事があるのなら話してくれないかしら。先生、力になるから」

柊夏子は向かいに座る戸部渡に優しく話しかけた。

低く澄んだ声は憂いを帯びて陰っている。

夏子は三十二歳の女教師。丸眼鏡をかけた柔和な顔立ちをしており、『綺麗で優しいママさん』と言われても違和感のない整った美貌の持ち主だった。

艶やかな髪をひつつめにし、身に着けるブラウス、タイトスカート、パンティストッキングによれも伝線もまったく許していないところが、教師らしい真面目な性格を表している。

柔らかい顔貌のパリツとした性格の彼女だが、女性的な魅力も豊富だった。

「は、はい……」

男子学生は俯いているが、チラチラと夏子の身体を覗き見ている。

赤い顔で恐る恐るといった様子が、性的なことに初であることを示しているように思える。

女教師の清楚な白ブラウスの胸元は、完熟メロンでも入れていそうな膨らみぶりだった。

尻たぶの充実度合いはタイトスカートを押し上げて、桃尻の輪郭をクッキリと浮かび上がらせるほど。

腰の括れが蜜蜂めいているので、胸と尻の量感が一層際だっていた。

スカートから伸びる夜空色のパンティストッキングの太腿もムッチリしており、胸や尻に勝るとも劣らない肉感的な魅力を放っている。

「進級して、新学期が始まってから行われた小テスト、どれも成績がよくないじゃない。去年はこんなじゃなかったでしょ？ だから先生、心配なの。何か問題があるのなら解決できるように手助けしたいのよ」

身を乗り出して肩に手を置き、彼を間近から見つめる。

勉強に関する事とか、対人関係に関する事とかは分からないが、成績の急落の裏で何か問題が起きていることはまず間違いないだろう。

生徒に心を開いてもらい、一緒に問題を解決するには信頼を得ることが肝要だ。だ

第一話 頼み込んで女教師姿でH!

から、こうして真摯な態度で訴える。

ところが、彼は身体を固くしてしまった。膝の上に置いた握り拳がプルプル震えている。

(ひよつとして嫌がってる？ 私、この子に嫌われていたのから?)

昨年受け持っていた時はそれなりに話をしていたし、彼も普通に応えてくれていたのだが。

彼の頬が完熟トマトみたいに赤くなり、ただでさえ俯いていた顔は、今ではほとんど真下を見ていた。

「戸部君、本当に何でも話してちょうだい。それとも、先生は信用できない？」

戸部渡は短髪で童顔の大人しい学生だった。部活動には入っていない、運動も得意でないせい、背が低く痩せ気味の身体をしている。

ルールを守り、勉強に励む実直な男子で、周囲や教師からも一目おかれているものの、平凡な生徒の域を出ない。そんな男の子だった。

「そんなことないですよ！ 先生が信用できないなんて」

彼が顔を上げて叫んだ。今まで聞いたことのない大声だった。

「よかった。じゃあ、戸部君は先生を信用してくれているのね。なら、話してくれないかしら。何か悩み事があるのでしょうか？ 先生が相談に乗るから……先生と一緒に問

題を乗り越えましょうよ」

膝の上に乗っていた握り拳に手を乗せ、顔を上げた彼の目を、台詞通りの思いを込めてじっと見つめる。

彼はまた俯いたが、少しするとおずおずと話し始めてくれた。

「あの……こんなことをいうと嫌われちゃうかもしれないんですが……」

「何言ってるの。先生、どんなことを言われたって、戸部君のことを嫌いになんてならないわ……絶対に」

最後の言葉に特に力を込め、彼の拳を強く握る。

沈黙。壁掛け時計の秒針だけが室内の音のすべてになった中、彼の次の言葉を辛抱強く待った。

彼は俯きながら苦しそうにあえいでいたが、やがて、意を決したようにギョツと目を閉じた。

変声期を終えたばかりのような子供っぽい声が、震えながら言葉を紡ぐ。

「僕……最近、先生のこと気がなくなって仕方ないんです……大きなおっぱいやお尻や太腿のことばかり考えてしまって……それで勉強が手につかなくて……あんまり眠れなくもなってます……」

一瞬、何を言われたのか分からなかったが、聞かされた言葉を何度か頭の中で反芻

させ、そして胸中で膝を打った。

(なるほど。私をオンナとして意識しているというわけね)

性に目覚めたばかりの思春期の少年にはよくある話だ

男性ホルモンの分泌が活発になり、牡として牝を孕ませる能力が成熟し始めているので、手近なオンナに発情しているのだろう。

同年代の少女たちもそれなりに女として発達している頃だが、彼の場合は円熟した牝を好むのかも知れない。

こんな告白を受けたのは初めてだが、別に驚くほど奇天烈なことでもない。

(さて、どうしましょう……軽く性の知識を講釈して、欲望の自制と発散の仕方を教えられるかいかしら)

性については保健体育でも教えているが、キレイ過ぎてあまり現実に即していない。その短所を補う風に教授してやればいいだろう。

彼に適した指導方針と内容を瞬時に組み立て、口を開こうとした瞬間、

「先生、お願いです……先生の身体を触らせてもらえませんか……!」

彼が真摯な目で言ってきた。

「え……?」

全然予想していなかった言葉に、まぬけな声を出してしまった。

「身体に触るって……私の身体に？」

「はい……。先生のおっぱいやお尻や太腿に触れてみたくて堪らないんです。昼も夜も、形を思い浮かべる度にどんな感じなのか想像してしまうのですが、実際に触れたことがないので分からず……。だから、本当はどうなのか気になって仕方がないんです……。！ 分かったら、きつと元通りの生活に戻れると思います、だから、お願いします！」

（意外に大胆な所もあるのね……）

大人しくて滅多に自己主張をしない男の子だと思っていたので、思い切ったおねだりには面食らってしまった。

相手が不真面目な生徒で、下品な下心丸出しで迫られたのなら、張り倒して説教してやるところだが、この男子は大人しくて真面目な性格なのだ。

もしも拒絶したら、思い詰めて精神を壊したり、世を憐んで人生を踏み外すということがないとは言い切れない。

誰がそうなってもいいものでもないが、教え子にそんな将来を歩ませるなど、考えただけでもゾツとする。

（私が独身だったら……可愛い教え子のためだもの、こっそり触らせてあげるくらい、させてあげてもいいのだけれど……）

自分は結婚して、夫とふたりで暮らしている身なのだ。
妻としての貞操というものがある。

「先生、お願いです、僕を助けて下さいっ！」

いつの間にか上から握っていた手が逆に握り返されていた。

彼の手の平は酷く汗ばんでいて、真剣な眼差しが心の中を代弁していると思わせた。
本当に必死なのだ。

(……この子が隠していた本心を引き出してしまった責任というものもあるわよね……
放ってはおけないわ)

自分が彼のこんな本音を引き出したことを思い出して、思う。

「分かったわ。でも、皆には絶対内緒よ？ でないと、私だけじゃなくあなたやあなたの家族まで大変なことになるんだから……教師と教え子が性的な関係になることを、世間は決して許さないものなの」

「は、はい！ それは分かっています。絶対に誰にも言いません」

童顔で真面目で自分をオンナと見てくれている子が、パアツと顔を輝かせる様子は、何だか母性本能をくすぐってくる。

(けっこう危ない橋を渡っているって言うのに、私は何を思っているんだか)
状況をわきまえない自分に、胸中で軽く呆れる。

「よろしい。じゃあ、ちよつと待ってね」

立ち上がり、カーテンを閉め切り、出入り口に鍵をかける。職員室に使用の許可はとっており、表には使用中の札を下げたので、怪しまれて誰かに乱入されることはないだろう。

「あ、服を脱ぐのは許して頂戴ね。まさか、学校で……しかも昼間の教室で裸になるわけにはいかないでしょ？」

軽口を叩くようにやんわりと釘を指す。

服の上からなら、生徒とのスキンシップ、じゃれあい程度のものだど、露見した時にギリギリ言い訳できるかも知れないという打算からの言葉だった。

素肌に触れさせたり、裸を見せたりするのは夫のいる身ではやり過ぎだし、可愛い生徒だとは思っても、恋人でもない男の子にそこまでするのには抵抗があるという気持ちもある。

「はい、分かりました！」

彼は勢いよく頷いた。不満の色は微塵もない。納得してくれたみたいだ。初なだけに、裸を見たり柔肌に触れたりということは考えもなかったのかも知れない。

「さてと……それじゃ、どんな格好になればいいかしら。座る？ 立つ？ 寝る？」

「えと……椅子に座っててくれますか？」

第一話 頼み込んで女教師姿でH!

立ったり寝たりの方が触れやすいはずなのにと思いつつ、言われた通りにする。彼は立ち上がるとパイプ椅子を横付けし、座り直した。

ふたりで同じ方向を見る格好になる。正面の大窓の外には清々しい青空が広がっており、鳥の鳴き声も耳に届く。

その下では部活に励む大勢の学生たちがひしめいており、飛び交う大きなかけ声が聞こえてくる。

(何だか緊張してきたわ……私はこれから、学校で生徒に身体を触らせるのね)
他の学生の存在を思うと、自分が教師であることと今まさに身体に触れようとしている隣の男の子が自分の生徒であることを強く自覚させ、背徳感を感じさせる。

ギシィッ。

パイプ椅子が軋む。彼が体重移動をさせた——つまり動いた証だ。

彼の身体から放たれる温かな熱と、肉が振りまく軽い圧迫感が近づいてくる。

聞こえる鼻息は少し荒い気がする。隣接しているとは言え、口の呼吸音も幾分高い気がした。

興奮しているのだろう。オナナに発情したオトコの反応以外の何モノでもない。

口臭は爽やかなミントの匂いだった。面談をする前に歯磨きガムでも噛んでいたのだろうか？

髪や肌から漂う匂いも、香水でも振りかけていたかのようにいい匂いだった。

（女教師に悶々として性欲を持って余していただけじゃなく、身だしなみに気を使うなんて可愛いところもあるじゃない。もしかして、私と会うから準備していたのかしら）
だとしたら少し嬉しい気がする。

（最初はどこに触れる気かしら。やっぱり胸？ それとも……）
思春期男子だけでなく、大人も乳房は好きだが、お尻や太腿に興味を示す男もいる。現に、彼はそちらにも興味があると言っていた。

自分をオンナとして見ている男がすぐ隣にいて、触れてくる最中なのだ意識すると、やはり少し緊張してしまう。

彼が自分を傷つけたりすることはないとは思っても、教師として人妻としての心持ちが、一線を越えることに抵抗を示しているのかも知れない。

身体も反応して、鼓動が少し早くなっている。

軽く喉が渇き、頻繁に生唾を飲み込んでしまう。至近距離だけに、忙しげな喉の動きは見られてしまっているだろうか。だとしたら恥ずかしい。

（私の方がずっと年上で、オトナなのに）

そんなことを思っていると手が迫ってきた。

「んっ………」

初めに触れてきたのは髪だった。

後頭部に巻いているひつつめ髪におずおずと触れてきて、ほとんど力のこもっていない手の平で、ペットを慈しむように優しく撫でてくる。

後頭部で渦巻くひつつめ髪に沿って束ねた指を這わせ、耳の上や後頭部にかかる髪は指をばらけさせた手の平で上から下へ落とすように撫で下ろす。

「先生の髪、艶やかでとても綺麗です。いつもそう思っていました。こうして触れて嬉しいです。さわり心地もつるつるしていいです」

手の動きに沿って頭皮に微細な振動が伝わってくる。そっと触れてくるような小さな圧迫感は不快でなかった。

（大人なのに……子供みたいに年下の子に撫でられて……）

こうして頭を撫でられるなど久しぶりだった。最後にしてくれたのは夫だが、それは夫婦の夜の営みが終わった後のこと。セックスの後には時々こうして可愛がってくれた。

だが、性交渉は随分とご無沙汰で、こうされるどころかスキンシップさえもろくにしていない。

だから、久しぶりに男に優しくされて喜んでいられる部分もあるのかもしれない。ひたすら丁寧な撫でられる内に、瞼が重たくなってきた。

「髪だけじゃなく……胸とかも触っていいのよ……？」

緊張がほぐれたからなのか、そんなことを言ってしまったが、次の瞬間にはカアツと顔が熱くなった。

自分からオンナの部分に触れていいなど、なんてはしたない。

それに、髪で満足してくれたのなら教師としても人妻としても、貞操も守れて都合がよかったではないか。

「は、はい……でも、いきなりおっぱいは……順序がありますから」

名残惜しそうな上擦った声で妙なことを言ってきた。

「順序？」

「従姉妹に教えてもらいました……女の人に触れるなら、こうしてリラックスしてらってから、少しずつ大胆なところに近づかないといけない……こういうことはふたりの共同作業だから、自分勝手にしてはいけないって……ひよつとして、間違っていましたか？」

髪を撫でていた手がピタリと止まる。彼は不安そうにこちらを見てくる。

「ううん、そう、それでいいの。いいことを教えてくれる親戚がいるのね」

にっこり笑うと、彼は安心したらしくホッと息をついた。

（親戚にこういう風に教えるセンセイがいるのなら、思った通り、乱暴にされること

はないのかしら。もともと大人しい性格の子だし)

そう考えると、緊張が更に解けた気がする。

微笑みかけられて自信がついたのか、彼は段々大胆になっていく。

髪を撫でていた手を肩に滑らせ、二の腕も撫で始める。

指を束ねた手の平には、髪を撫でていた時よりも力がこもっている。とは言え、強すぎず弱すぎず、丁度いい具合だった。

彼は同時に身体も寄せてきた。恋人同士がベンチで寄り添うような格好になる。

「すんすん……はあ……先生の髪も身体もとってもいい匂いです。ハツカ飴みたいに甘いです」

首を乗り出し、髪やうなじの匂いを嗅ぎながらうっとりと言ってきた。

荒くなってきた鼻息と呼気に肌がくすぐられ、彼の顔から漂うぼうつとした熱感が、自分の体臭で興奮されている実感を思い知らせる。

「やだ……そんなに嗅がないで……女性の体臭を嗅ぐなんてエチケツト違反よ？」

年下の男の子とは言え、自分の匂いを嗅がれるのは恥ずかしい。

「あ、済みません……つい……あんまりよかったもので」

彼はすぐに謝ってやめてくれたが、酷く名残惜しそうだった。

(そんな顔されたら弱いじゃないの……)

自分に非がないことは明らかなのに、無抵抗な子を苛めたような罪悪感を覚える。「これから気をつけてね……好きな子ができたら、その子に同じことをしてはダメよ？ 今だけは……私にはいいけど」

優しく諭したつもりだったが、すぐに胸に触れていいと言った時と同じ後悔が来る。(はあ……また墓穴を掘ってしまったわ……)

「は、はい！」

だが、嬉しそうに頷く彼を見ると、仕方ないと諦めがつく。

くんくん、す——んっ、なでなで、なでなで。

本人の許しを得た彼は、思うままに匂いを嗅ぎ、肩と腕を撫でてくる。

匂いの嗅ぎ方は無遠慮なもの、本当に喜んで嗅いでくれていることが伝わってきた。身体を撫でる手つきも紳士的で、乱暴さは一切ない。

(なんだか、気恥ずかしいわね……)

そんな態度が心をくつろげさせてくる。夫と睦まじく身体を触れ合っていた時を思い出させ、心身の緊張が氷が溶けるみたいに消えていく。

「先生、そろそろ……ふ、太腿を触らせてもらっていいですか？」

肩に手を置いたまま、タイトスカートから伸びる黒パンストの太腿を見ながら恥ずかしそうに尋ねてくる。

第一話 頼み込んで女教師姿でH！

その目は期待に満ちていた。彼にとって女教師の太腿がどれほど高嶺の花だったかを雄弁に語っている。

「え、ええ……いいわよ……約束していたものね」

声が固くなったのは自分でも分かった。

髪や頭と違い、太腿は女性器と繋がる部位なのだ。

ほぐれていた心身も緊張してしまおう。

そこは、心を許したオトコ——今なら夫だが——にしか触れさせてはいけない場所である。

「ありがとうございます」

丁寧に礼を言い、彼は明るい表情で太腿に触れてくる。

膝の上に着地して、そこからスカートの裾まで這う。

「んっ………ん………」

太腿を覆うのは、針穴よりも小さな編み目の薄布だ。ブラウスの肩を撫でられていた時よりも彼の感触がよく伝わってくる。

きめ細かく、女のようにほっそりした指を束ね、手の平を軽く押しつけてくる感じだった。

体温は常人並みで、触れられている箇所がぼうつと温かくなっている。手の肉のし

なやかさは、若い女の子に撫でられている気にさせられる。

「んんっ……………んふ……………う……………」

手は膝とスカートの間をゆっくりと往復している。まるで浜辺でサンオイルでも塗られているような具合だった。

（う……………気持ちいいかも……………私の太腿は結構敏感な方だし……………あの人にずっと触られてないから……………）

夫との性生活が乏しくなっていたので、太腿を男に触れられるのも久しぶりだった。異性に愛撫されて喜んでいるのか、彼の手の動きに沿って官能的な微電流が太腿を舐めてくる。

思わず呼吸が上擦って、身を縮こまらせてしまう。

すると彼はパンストの太腿を撫でながら、肩を抱き寄せて身体の密着度合いを上げてきた。

生徒と人妻教師は、まるで恋人同士みたいに身を寄せ合う格好になる。

太腿を撫でる手つきが丹念さを増していく。

「先生の太腿も、すごく綺麗です。パンストのざらざらした撫で心地と、その下にあるムチュチした太腿の感触がとてもいいです……………温かくて、マシユマロみたいに柔らかいのに弾力があって……………先生の身体はこんな感じなんだ……………僕のととは全然違って

第一話 頼み込んで女教師姿でH!

触れてるだけで気持ちいい素敵な身体だあ……」

ここまで褒められては悪い気はしないが、生徒に言われているので複雑だった。抵抗しないことに気を大きく持ったのか、閉じ気味の太腿の間に手を入れて、太腿の奥の方まで触れ始める。

(そこは……っうう……んんくうっ……)

女教師は鼠径部に近くなるほど敏感なので、触れられる度にうなじに快感混じりの寒気が走る。

夏子の顔のすぐ隣に来ている童顔は神妙な赤ら顔だったが、鼻息と呼気がかなり荒くなっていて、興奮が高まっていることが分かった。

「柔らかいです……こうしてるだけですごく気持ちいです、先生」

「そ、そう……んふう……よかったわ……あ」

普通の男ならば我を忘れてむしゃぶりついてきそうな位に興奮している様子なのに、彼の所作には依然として荒さがない。

徐々に力が籠もってきてはいるが、感じるのは痛みよりも仄甘い快感だった。

膝、上腿、腿の外側、そして内側。椅子と密着している裏側とスカートに覆われた部分以外を、彼の手の平は何度も何度も往復する。

(ああ、やだ、この子……上手かも……太腿が気持ちよくなって……)

手の平に与えられる甘美が徐々に濃密になっている。

褒められながら優しく愛撫されているうちに発情して、快楽に鋭敏になっているの
だろう。

（あ、だめ、そんなに深い所まで来たら、アソコに触れちゃう……）

もう何度目だろうか。内腿を撫でられ、スカートの中に指先が入り込む。

恥丘には触れていないものの、視線に圧迫される時のじゅんとした重たい衝撃が恥
丘に伸しかかってくる。

恥ずかしいとは思いますが、その感触は甘ったるい。愛撫される時に感じる、肌に染み
込んでくるような優しい快感だ。身体が昂らされているだけに、そんな感覚にも鋭敏
になっている。

（身体も火照ってきて……）

熱くなり始めた太腿の熱が伝播したかのように、身体も火照りだしていた。ふわふ
わとした浮遊感もあり、まるで夫に愛撫をされているよう。

「せ、先生……立ち上がってくださいますか？」

太腿を撫でていた手で外側の手を握り、じつと見つめて言ってきた。

目は潤んでいて、頬が紅葉みたいに紅潮している。

「え、ええ……分かったわ……」

(これから何をするつもりなのかしら?)

かなり興奮しているようではあるが、自分を見失って乱暴をしてくる様子はない。立ち上がると、水から上がったみたいに身体がずっしりと重く感じた。

(やだ……私ったら、思ったよりも感じてしまっていたの……?)

今まで快い浮遊感を感じていたことを考えれば、快感で脱力していたことになる。際どいスキンシップ、生徒とのじゃれあいと思いこもうとしていた気持ちに冷や水をかけられた気分だ。

(流されてはだめよ……相手は○○。自分まで夢中になるなんて大人の女失格じゃない……セックスの経験だってあるいいオバサンなのに)

そう自分に言い聞かせながら、彼の手を握り返して立ち上がる。

連れて来られたのは照明の下だった。

明るい白い光が、女教師と男子生徒を照らす。

「先生、また太腿に触らせてください……今度はもっと根本を触らせてもらってもいいでしょうか?」

後ろに回り、胸板を背中に密着させながらおずおずと切り出してくる。

「根本って……太腿の付け根……?」

彼の両手は、行儀よく飼い主の指示を待つ犬みたいに膝の上に乗っている。

ゾクリ……。

一瞬、それがスカートを捲り上げて鼠径部を揉みしだいている光景が頭に浮かび、股間に妖しい甘美感が走った。

「お願いです。でも………嫌だったら諦めます……」

尻切れトンボで消え入った声は、可愛そうなくらいにしぼんでいた。胸を鈍く痛ませる言い方だった。

（仕方ないわ……触らせてあげるって言ったのは私なんだし……満足させない内に拒絶して、荒まれたら困るし）

スススス……。

「い、いいわよ……ほら、好きなだけ触りなさい……」

腰までタイトスカートをたくし上げ、股間を晒して言ってやる。

スカートという覆いがなくなったことで、股の圧迫感が和らいで軽くなり、同時に空気が押し寄せてくる。

黒いパンストの奥では、ふくよかな恥丘にそって盛り上がったエメラルドグリーン
のハーフバックショーツがうつすらと見えている。

パンストとショーツがあるとはいえ、まるで裸になったみたいに恥ずかしい。

努力したが、声が微かに上擦ってしまった。

恥ずかしくて顔が燃えるように熱くなり、心臓もドクドクとうるさい。

「ありがとうございます！」

明るいお礼と同時に、手の平が上ってきた。太腿の付け根に到着すると、鷲掴みにした胸をやわやわとほぐすように揉んでくる。

「んっ……ンン……ッ……あふ………はああ……」

太腿の付け根がぐにぐに歪む。肌の中に指が食い込み、肉の弾力によって跳ね返される。

力加減は巧みだった。顔は見えていないはずだが、こちらの息づかいや身体の震え、態度などを観察しながら、探るように揉んでいるみたいだった。

「ああ、先生のここ気持ちいいです……揉んでいるだけで興奮します……」

彼は身体をぐいぐい密着させてくる。

薄い布を隔てて、胸板の体温と感触が伝わってくる。筋肉質とは言えないが、それなりに逞しい。童顔であっても、牡には変わりないのだと認識を改めさせられる。

うなじには彼の吐息が吹き付けられている。はあはあとせわしく吐き出される呼吸は熱っぽくて重たかった。

ゾクゾクゾクゾクッ。

「うくっ………！」

背筋に快感の鳥肌が立ち、ぬるま湯を浴びせられたかのように股間がじわっと熱くなる。

柔肌に吐息をぶつけられ、弱い太腿の付け根をじつくりと揉まれていると、オナナの部分に起きた熱が少しずつ熱くなっていく。

男とのセックスのうまみを知る身であるだけに、熱いだけでは済まず、膣壁全部がじいんと疼いてくる。

(まずいわ……私まで発情してきて……んんっ……私は教師で、夫のいる身で、この子はただの教え子なのに……)

そう思っても、湧いてくる甘い感覚は一向に鎮まらない。

「先生、ああ、先生、僕もう堪りません！先生のアソコ見たいです、見せてください、お願いします！」

弾かれたように手を離し、前に回り込むと彼は跪いた。今にもパンストを筆り取りそうな雰囲気、腰骨を握りしめてくる。

手の平は汗でじっとりしており、熱した鉄棒みたいに熱くなっていた。

彼の熱は腰の内部に伝わってきて、膣内の熱を大きくする。

(わ、私のアソコをじっと見て……真剣な顔で、息を荒らげてじつと……じつくり見て……！)

第一話 頼み込んで女教師姿でH!

普段の穏やかな眼差しがなりを潜め、代わりに欲望の籠もった牡らしい目になっている。

パンストとショーツに包まれた恥ずかしい膨らみが強い鼻息で撫でられる。

強い視線と鼻息はショーツの奥をますます淫らに熱くする。愛液がじゅんっ、と分泌しているのが自分でも分かった。

(駄目だわ……あと十分もこんな状態が続いたら、ショーツから愛液が溢れてしまうかも知れないし、この子も我慢しきれなくなつてアソコを無理に見ようとするかも知れない……そうならない内に、満足させて終わりにしないと……)

腰骨を握っていた彼の手をそつと剥がし、代わりに自分の手で握る。

「わかったわ……いま、見せてあげるから落ち着いて……ね？」

彼に任せて伝線する可能性を恐れ、自分からパンストとショーツをゆっくり膝まで下ろした。

剥き出しになった股間と太腿に大気が押し寄せてくる。まるで、風呂から上がって脱衣所に移動した時みたいだった。それだけ自分は火照っていたのかと驚いてしまうくらいだった。

(ああああ、遅かった……のね……恥ずかしい……)

離れ離れにした陰裂とショーツの間にごくごく細い糸が引いている。考えるまでも

なく愛液の糸だ。

「これって、先生の愛液の糸……先生は僕に触れられて感じていたんですか……？」
感動したように目を輝かせながら返答に困る質問をしてくる。

肯定すれば生徒に感じさせられた女教師というレッテルを受け入れることになり、否定すればそれを回避できるだろうが、彼は男としての自信を砕かれてトラウマになつてしまいかも知れない。

「そ、そうよ……なかなか上手だったから……」

葛藤したが、生徒思いの女教師は前者を選び、微笑みかけた。

「ああ、嬉しいです……よかったあ」

見上げる顔は見たことがない位にパアツと輝いた。憧れの女教師に牡として認められた誇らしさが滲んでいるように見える。

「先生のここ、とても綺麗です……こんな形をしていたのか……」

剥き出しになった細腰を握りながら、陰部を熱烈に凝視してくる。

「毛がびっしり生えていて、ぷつくりと膨らんだお肉がそれを丘のように盛り上げて……スンスンスン、匂いも汗混じりの甘酸っぱい……とてもいい匂いです」

嬉しそうに口にしては、ヘアが生い茂る膨らみに鼻の頭をくっつけて匂いを嗅ぐ。

(言わないでよお……恥ずかしいじゃない……)

思わず苦痛に耐えるようにギュつと目をつぶってしまう。顔は真っ赤で、目尻には涙が浮いている官能的な表情だった。

「あ、ダメッ！」

なんと彼は舌を伸ばし、陰裂に差し入れてきた。

唾液でぬめるプリプリの肉板が大陰唇の割れ目を横に押し退け、小陰唇を巻き込みながら膣口を通過し、ぴったり閉じていた肉壁を擦り開きながら奥を目指す。

「駄目よ……あああ、そんなとこ汚いわ……あああ」

舌に擦られる膣肉にバチバチと快感電流が走り、背筋をゾクゾクさせる。教え子であり、夫でもない男性の舌を入れられていると言うのに不快感はなかった。

あるのは、心に染み込んでくるような甘美感。胸が心地よく詰まり、パンプスの中で足指が丸まってしまいうくらいに濃密だった。

彼の上下の唇がヘアの茂みと密着する。根本まで舌を差し込んだ姿は、大口を開けて餌にかぶりつく動物のよう。授乳する時に乳房に食いつく赤子よりも野生的で浅ましさに満ちた光景だった。

口と股間の接着面に、熱い呼気が熱波として吹き荒れる。既に熱くなっていた恥丘よりも熱く、男性に食いつかれていることを思い知らせる。

肉には口内の温かさも伝わってくる。まるで、下の口で彼とキスしている気分だっ

た。

「んあああ、舌、動かさないで……はふうん……!」

膣内に収まった舌は、膣肉の圧迫には負けないとばかりに内側から舐め擦り出した。夫とのセックスで成熟し、溝を深くした肉壁がゾリゾリとこそがれる。柔らかくて硬い舌尖と側面が肉溝の浅い部分を巻き込むように擦り上げ、凹凸の大きい舌のザラザラが深い所をめくり上げるように擦ってくる。

熱い食べ物を頬張っているみたいにハフハフと息を乱しながら、執拗にねちっこく舌をそよがせてくる。

(んんっあ……あああ、こんな風に舐められたら堪らなくなっちゃう……)

「ジュルルルツツツ! ゴクンゴクン……!」

「んん……んふうっ……ああああアア……!」

今度はヘアの肉丘にガツシリと唇を食いつかせ、思い切り吸引してきた。

舌愛撫で搾り出された愛液が一気に彼の口内になだれ込み、喉奥へ導かれ、胃の中に落ちていく。

他人の体液をゴクゴク飲んでいるというのに、彼は嫌な顔一つしない。喉がカラカラになっている時に、極上のジュースを飲んでいるかのような陶醉の色を浮かべている。

第一話 頼み込んで女教師姿でH!

彼の唇の外側に、愛液と唾液の混ざり汁がこぼれ、顎を伝って喉まで垂れている。

「はあ……はあ……先生の愛液、甘酸っぱくて、トロトロで美味しいです……先生のアソコの舐め心地も最高です……ああ先生のアソコと愛液……」

(……わ、私……教え子にアソコのこと知られてしまったのね……夫でもない男の子にしゃぶられて……)

際どいスキンシップ、ただのじゃれあいなどという言い訳は絶対に立たないところまで、いつの間にか踏み込んでしまっている。

しかも自分は、身体を昂らせ、快感にわなないている。我を忘れてしまうほどではないにしろ、彼の口が離れた秘裂からは太腿に向かって愛液の川ができ、舌が抜かれた膣は物欲しげに鈍く疼いている。

(いけないわ……このままじゃ、私がこの子を欲しくなっちゃう……触らせて、満足させて、悩みを解決してあげようとしていただけなのに、この子をオトコと認めて求めてしまう……!)

教え子の前で、夫でもない男子の前で牝になってしまおうのではないかという危機感に襲われ、口を開く。

「もう十分でしょ？ 服の上から触れるだけって約束だったのに、先生のアソコを舐めて、恥ずかしいお汁まで飲んじゃうなんてルール違反よ」

「すみません……でも、僕、堪らなくて……お願いです先生、僕が先生をイカせるところまでさせてください！」

真摯な目でとんでもないことを訴えてくる。

「だ、駄目よ……私たちは生徒と教師で、私には夫がいるのよ？ そんなことまで……そんな関係になったら……」

「お願いです、先生。僕は、大好きな先生を自分の手でイカせてあげたいんです……先生以外の女性に全然興味が湧かないから、もしかしたら僕は一生童貞かも知れませんが……だから、この機会を逃したら一生後悔するかも知れない……そんなのは嫌です！ お願いします！」

必死な目ですががりつくように叫んでくる。

（そんな目で一生懸命頼まれたら……断れないじゃない……）

快感でぼやけ始めた頭では、当たり前障りなくこの行為を終了させる方便が思い浮かばない。

（中途半端で止めたなら……やっぱりこのことを後々引きずるかも……）

真面目な性格だけに、心を開いた女性に最後に拒絶されたら女性不信に陥る可能性も考えられる。

「……でも、女性を絶頂させるのは簡単なことじゃないわよ？ 絶頂を知らないで一

生を終える人もいるという話しだし……」

「はい、だから頑張ります。頑張って、先生に気持ちよくイッてもらいます!」
そう言うと、再び陰部にべったりと口を付けた。

腰骨を握っていた両手を大陰唇の根本に添え、両開きの窓を開くみたいにくぱあつと開く。

愛液が溢れる前に口をそのまま内部にめり込ませると、陰核を食んできた。

「くうううううう! んっ……はあっ、はあっ……そ、そこは……!」

一瞬、頭の中が真っ白になった。

愛液と唾液で濡れた唇は、指で埃を摘むような力加減で陰核をやわやわ揉んでくる。これまでの行為で充血し、敏感さを増している快楽器官に絶妙な刺激を送ってくる。

唇の微細な圧迫を受け、陰核はギュウギュウとひしゃげさせられ、その度に蜂蜜めいた濃厚な甘美感が全身を貫く。

思わず彼の頭を握ってしまい、背中がグツと仰け反ってしまう。口から吐き出される呼気は熱くて湿り気満点だった。

唇は充血してバラ色に変わり、吐き出す吐息と嬌声を上げる弾みで飛び出す唾の水気で濡れそぼっていた。

上気した顔の瞼はずっしりと重く、重さに耐えきれなくなった目はトロンと細まっ

ている。

「ジュズズズズツ、んふう〜っ、ズ〜〜〜ツ！ んふう——ツ！」
鼻で荒々しく息を継ぎながら、今度は執拗にバキュームしてくる。

唇の中で小刻みにそよがされ、その刺激で背筋がゾクゾクしっ放しになってしまう。

「あああつ、ああ〜〜〜！ くううンンンっつ！」

（マズイわ……ほ、本当にイカされちゃう……この子、上手っ、こんなにスゴいこと
どこで覚えたのよ……ツ！）

絶頂の味を知る人妻だけに、自分がいかに土俵際に立たされているのかはよく分かる。

頭はずっと真っ白で、思考がほとんどできなくなっていた。

身体は燃えているように熱くなり、逆る快感電流は強く深くなる一方。うなじ、背中、尻、太腿は粘り痙攣を繰り返している。

生徒に、夫以外の男に絶頂させられそうな女に、年若い牡は容赦しない。

舌も参戦させてきたのだ。唾液でぬめぬめの舌先で、今にも包皮から飛び出しそうな陰核のそこかしこをつつき回し、右へ左へと転がすように根本から倒してくる。

口の吸い上げも織り交ぜてくるので、快感刺激に飽きることも、耐えるために備えることもできなかつた。

第一話 頼み込んで女教師姿でH!

「ああっ、アアア~~~~、ハアツ、ハアツ、ああっ、ああっ、んああアンン！」
呼吸音が上擦り、嬌声が切迫する。もう、教師としても大人としても外面を取り繕うことはできない。

女教師姿の柊夏子は、若い牝に牝としての姿の片鱗を引きずり出されていた。

「ジュルルツ、ンフ——ツ、ジュ~~~~~~~~ツツツ！」

「んひひひひひ——！」

ビクビクビクビクビクビクビク！

大きく鼻で息を継いだ後の最大級のバキュームをお見舞いされた瞬間、足指が思い切り丸まった。言い訳できないくらいに身体が背伸びしてしまい、更に背中がグンツと仰け反る。

若牝の頭を強く抱え込み、生徒の口内に夥しい恥液を噴出させる。

「チュ~~~~~~~~ツ！ ごくつごく、フーツ、ジュ~~~~~~~~！」

夫でもない若い男は、女教師の陰裂が吐き出す汁を嬉しそうに吸い飲んでいる。

顔を股間に押しつけられたまま、夫以外は触れることのできない、ふたつ並んだ豊かな尻たぶを汗ばんだ熱い手の平でギュツと握りしめながら、下品な吸飲音を響かせて、ゴクゴクと喉を鳴らしている。

（ああああっ、飲まれてる……私の恥ずかしいお汁をこの子に……イカされた上に飲

まれてる……！)

吸引に合わせてそよぐ臈肉や、貪欲に汁を搔き出そうと臈襖を搔き抉ってくる舌の熱感と肉感を感じながら、胸中で呻く人妻教師。

(こんなこといけないのに……ああ、気持ちいい……)

教師としても、人妻としても許されない感情であるのだが、そう思っても身体にべったり纏わりつく心地よい倦怠感は霧散しない。

「ふはあ……は……は……は……は……あ……あ……あ……あ……先生、ありがとうございます。すごく嬉しいです。僕、先生をイカせたんです……！」

女を征服した若牡は、清々しいほどキラキラしていた。

自信に満ちあふれているような表情で、こんな顔をしているのは初めて見る。

「はあっ……はあ、そ、そうね……んんっ……はあ……あ……あ……せ、先生、イカされちゃったわ……はあ……はあ……はあ……」

(そんな顔されたら、こう言うしかないじゃないの)

はしたないと思っても、淫らだと思っても、快感の余韻でぼやける頭には他に上手い台詞が思いつかない。

言いながらこぼれた吐息は、夫とのセックスの後のものみたいに重たげで色っぽく、自分の溜め息ながらいやに官能的に感じられた。

第一話 頼み込んで女教師姿でH!

その夜のこと。

「あなた、お帰りなさい」

夏子は帰宅した夫を出迎えた。

桜色のノースリーブに、紺のミニスカートという出で立ちだった。

薄布の胸元からはこぼれんばかりに乳房が盛り上がり、腋の下からは横乳がチラリとはみ出ている。

短いスカートからスラリと伸びる生足は艶めかしい白さを振りまいている。

「夕食もお風呂の用意もできているから。どっちがいいかしら」

仕事鞆を受け取り、必要以上に近づきながら言う。

夫は少し戸惑っていたようだったが、食事を先にすると告げた。

(意識してくれているかしら)

昼間、男子学生と性行為を行ったことに夏子は汚辱感めいた感情を抱いている。

彼が嫌いだったり、セックス行為を嫌悪しているわけではないが、やはり、許されないことをしてしまった罪悪感と、それをした自分への嫌悪感は感じてしまう。

夫と交わり、夫婦の絆を確かめることでそれを拭えるかも知れないと考えたので、

頼み込んで人妻教師とコスプレH！

こうしてはしたない薄着で夫と接しているのだった。

だがこの夜、久しぶりに夫婦の情交を行うことはなかった。夫は迫ってこなかったし、仕事に疲れている様子を見ると、自分のオンナをPRするのが精一杯で、それ以上のアプローチをかけることは躊躇われた。

そんなことは次の夜も、その次の夜も続き、結局、じくじく痛む古傷のような思いが解消されないまま月日が流れていった。

第一話 頼み込んでブルマ姿で！

初夏に入り、中間考査の結果発表が行われた頃。

「約束を守ってくださり、本当にありがとうございます！」

誰もいない教室で、戸部渡が向かい合う柎夏子へ元気澁刺に謝辞を述べた。

「え、ええ……約束、ですものね……」

対する女教師は齒切れが悪い。

(困ったわ……まさか本当にトップテン入りするなんて)

前回、身体をまさぐられ、クンニで絶頂をキめさせられた後、ふたりは一つの約束を交わしていた。

彼が中間考査で男子の十位以内に入ったら、夏子がまた秘密の個人授業をするというものだ。

憧れる女性の色気に舞い上がった思春期男子の一方的な申し入れだったが、女教師は勢いに押されて承諾してしまった。

教師が約束を反故にするわけにもいかないの、渋々、教職員しか出入りできない休日の昼間の教室に招き入れ、こうしてふたりきりになっている。

「これを着てもらえますか？　言うことを聞いてくださるって約束に甘えて用意してみました」

無地の紙袋を差し出してきた。取り敢えず受け取って中身を見る。

「え……ちよつと、これって……」

入っていたのはコットンの純白体操服と黒のブルマで、白いハイソックスとズックまで入っている。これらは女子の体育着と言える物だが、どれも、この学校の女子の体育着ではない。

「こんな物、どこで手に入れたの？」

「バイトで稼いで通販で買いました。先生に着て欲しくて……」

真顔で言うてくる。

(まいったわ……三十過ぎの私がこんな物を着るなんてまるつきりイメクラじゃないの……恥ずかしい……)

年甲斐もなく、しかも生徒であり、夫以外の男の前でこんな衣装を着たいとは少しも思わない。

これらを身につけた自分を想像しただけで軽い目眩を覚える。

(でも、一生懸命勉強しながら働いて、ようやく買った物なのよね……)

性的な下心が原動力になっていたとは言え健気だと思う。方向性さえ間違っていない

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

ければ、努力には喜んで応えてやりたいところなのだが。

「お願いします、先生、どうか着てください！」

(う……そんなに真剣な目で見られると弱いわ……)

一生懸命頼み込んでくる姿勢は真摯で、断り辛い。

少しの間、約束を守ることと自分の体面を天秤にかけて悩んだが、結局、自分にとよりも約束を守ることを取った。

断ることで、努力は報われないとか、大人は約束を破ってもいいなどと性格が歪んでしまったらと思うとゾツとしたから。

「……しようがないわねえ……約束は約束ですもの……分かったわ」

すると彼は顔を輝かせた。喜悦混じりの声で何度もお礼を言ってくる。

「それじゃ、着替えるから向こうを向いていてくれるかしら」

着替えも見たいと言ってくるかと思っただが、そうはならなかった。彼は大人しく従って後ろを向いてくれた。

(そうだ……この子は私の服のサイズは分からないはずだから、これを着れるとは限らないわよね。着れなかったら遠慮なくそう言って、こんなイメクラみたいなのは回避しなくちゃ)

そう思うと幾分心が軽くなった。

だが、その通りにはならなかった。不運なことに、彼の用意した物はすべて着れてしまったのだ。

「も、もういいわよ……」

ゆっくり振り向いた彼が目をキラキラさせた。

「うわあ……先生、スゴく似合っています」

感極まった声で言ってくる。本当に感激しているらしく、目にみるみる法悦の涙の膜がかかる。

「そ、そう……でもこれって少しサイズが小さいから見苦しいんじゃない……？」

靴下と靴はピッタリなのだが、体操服とブルマが計ったように一回り小さい。

「すみません、前に先生に触らせてもらった時のことを思い出してサイズを予想して用意したんですが、目算を誤ってしまったんですね……でも、見苦しいなんてことはぜんぜんありません。とても素敵です」

心の底からの感想らしく、陶醉した面もちを浮かべている。

(うう……そんなに頭のでっぺんから爪先までじっくり見ないでよお……)

三十過ぎのオトナのオンナが、若い童貞の視線に赤面する。

体操服とブルマから伸びる手足はスラリと長く、見るからにしなやかだ。

サイズが小さいので、豊胸を押さえ込む胸元はタイトみたいにピンと張りつめてい

第二話 頼み込んでブルマ姿でH！



た。押しくら饅頭をしながら並んでいるメロンじみた球の輪郭がクツキリと浮き上がっている。

ブルマのサイズも小さいので、下半身はまるでハイレグショーツを穿いているみたいな格好だった。

鼠径部に嵌まるべき布のラインがずっと内部にきていて、こんもりした恥丘の膨らみの縁が露出してしまっている。

足の長さとはボンレスハムみたいな太腿の肉感も際立っている。

同時に、へその下から胴底にかけての女性らしい局面がぎゅうぎゅうと布を押し上げている。

バックの布は臀裂に深く食い込む有様で、ふたつ並んだ尻たぶの半分近くがムツチリとはみ出している。

「先生、そろそろ失礼します」

彼はキビキビそう言うと、正面から近づいてきた。

鼻息が当たる距離まで接近すると、おもむろに胸に触れてくる。

「はああ……先生の胸、大きくて服の上からでも柔らかいです」

ほとんど力を込めていない手の平で、浮き上がる乳房の輪郭を撫で回す。

上乳から横乳を経由して下乳へ。その後は乳首を目指して螺旋状に膨らみを上って

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

いく。

服とブラジャーを越え、彼の手のしなやかな感触と温かい体温が伝わってくる。

興奮で微かに荒くなっている鼻息と呼気が顔に当たる。匂いは今日もミントの香り。爽やかで不快さをちっとも感じさせない。

よく見れば、短い髪も綺麗に整い夏用の制服もクリーニングしたてのようにパリツとしていいる。自分に会うために身繕いしてきてくれたのだろうか？ だとしたら、少し嬉しい気がする。

(でも、やっぱり緊張するわ……)

理由はどうあれ、職権乱用してまで生徒と逢い引きしているわけである。しかも、自分分は人妻でもあるのだ。その事実がどうしても頭から離れず、彼の所作は優しく丁寧であるにもかかわらず、身体が強張ってしまう。

「ん……んふう……んっ……」

彼は十指を広げると、そっと鷲掴みにしてきた。

女教師の双胸は男子の手を大きくはみ出している。彼が指に力を込めて乳肉に食い込ませてくると、服の内部で乳肉がその通りに溝を作る。

間に布があるのでそれほど快感でもないが、じわじわと官能を搾り出されるような感覚だった。

五分、十分と飽きずに続けられているうちに、乳房の内部が、じいんと重く痺れ始めた。時々、布ごと乳肌をピクピク振幅させてしまう。

「先生のおっぱい……ああ、太腿よりも柔らかくて、大きくて……先生、生のおっぱいを見せてもらっていいですか？」

母親にお菓子をねだる子供みたいな目で、こちらの目を見ながら言う。

（やっぱりそうなるわよね……ウブだと思っていたのに、前はクンニまでしてきたんだもの。体操着を着て、服の上から胸を揉ませるだけで満足するはずはないわ）生徒であり、夫以外の男でもある男子に裸の胸を見せることなど気が乗らないし、していいことでもない。

しかし、約束がある。ここまで来て拒絶することなどできやしない。

「ええ……分かったわ……約束ですもの……見せてあげる」

意を決すると、窮屈な体操着を首下までめくり上げた。その拍子に、ブルン！ブルブル……。

飾り気のないハーフカップブラに包まれた豊胸が大きく弾み、やがて静まる。

（仕方ないわ……ここでやめることはできないから……）

胸元に向かって、矢のように突き刺さる熱烈な視線を感じながら、背中に手を回してホックを外し、ワイヤーを緩ませる。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

押さえをなくした乳房はボロンとこぼれ、カップを横に押しやった。ストラップから手を抜き、ブラを完全に外すと、それを足下に置く。

「はあああ……すごい………ごくっ………」

堂々と鎮座する裸の豊胸に、思春期の男子が溜め息を漏らす。

鎖骨の下からぶら下がる肉メロンは見事な球形を形作っている。陶磁器の白さに近い乳肌はきめ細かく、窓から差し込む陽光を受けてキラキラと光輝いている。

先端に広がる乳輪のサイズは乳房の大きさと調和がとれていて、色はやや黒ずんだ鴉色だった。乙女のような初々しい色艶は褪せているものの、セックス経験のある女の持ち物としては相応しく、釘付けになる若牝の目には不満の色はない。

ツンと上向く乳首も乳輪と同じ色をしており、形は球と言うよりも円柱形だった。表面の所々に凸凹があり、皿みたいに扁平な頂上には小さな瘤がボコボコと出ている。

スーッ、サラサラサラサラ……サササ……カリカリ。

若い牝は吸い寄せられるように両手を伸ばし、乳肌を撫で始めた。

指を綺麗に束ね、親指以外の指の腹で指の脂を乳肌に満遍なく擦りつけるようにしている。

「先生のおっぱい、温かくて……柔らかい………」

「あっ………んんっ………っふう………」

ピッタリと指が束ねられているもの、触れてくる指には力が入っていない。若い男の体温が籠もったしなやかな手指に触れると、くすぐったいような、心地いような感覚に見舞われる。

数分も続けられていると乳肌がピリピリと熱を持ち始めた。胸肌が時々微細に振幅しだすと十指が大きく広がり、乳房を正面から鷲掴みにしてきた。

「はうんん…はあ…はあ…はあ…ああん…」

十指を同時にゆっくり食い込ませ、もうめり込まないという所までくると静かに力を抜いていき、乳肉の弾力に委ねて弾かれる。そして、また指を食い込ませては、力を抜いて弾かれる動作を繰り返す。

荒々しさはない。それどころかこちらを気遣う心が感じられる丁寧な挙措だった。痛苦はなく、背徳を犯している嫌悪感さえもあまり湧いてこない。

「んっ…んふううう…んあ…はああ…はああ…」

じわじわと胸を締め上げられると、思わずうつとりしてしまいそんな陶酔が胸中に広がる。乳肌が元に戻っていく時には心地いい解放感に見舞われ、思わず官能混じりの重たい吐息をこぼしてしまう。

乳房の内部からは、白熱電球みたいな熱が湧いてきて、乳肌に起こっていた微熱を呑み込んでいく。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

「先生のおっぱい……ああ、掴めないくらいに大きくて、重たくて……すごく柔らかい……肌も綺麗で、何だか甘いい匂いもするし……とても素敵です」

大胆かつ壊れ物を扱うみたいに丁寧に胸を揉みながら感激した風に言ってくる。

（背中がゾクゾクしてきちゃう……んああつ……こんな風に胸を揉まれながら褒められたら……ああ、嬉しさがこみ上げてきて……この子にそんな気持ちになっっていないのに……）

丹念に揉まれるのが気持ちよく、優しく褒められるのが心地いい。

乳房の内部に響き渡る乳悦が甘さと濃度を増していく。

愛撫と巧言が緊張をほぐし、愛する夫とベッドにいる時みたいにリラックスすること
を促してくるせいだろう。

（流されては駄目……この子の愛撫に夢中になっっては……私は教師であの人の妻なのよ……これは、彼へのサービスみたいなもので、オンナとして彼を求めているわけじゃないんだから……!）

流されてしまいそうな自分に言い聞かせ、快感に喜びだしていることを戒める。

「先生の乳首も、乳輪もいいです……綺麗というよりもいやらしい感じで……こんなに勃起してしまつて……」

気がつくくと、乳首は恥ずかしいくらいに大きく長くなっていた。小指の先くらいは

あるだろうか。

ぷっくりと膨れ上がり、乳首の表面に散在する凸凹も、クレーターが広がる月面みたいにクツキリと目に見える。

乳輪もドーム上に膨張しており、乳房も一回り大きくなっている。これでは発情丸出した。

（ああああ……恥ずかしい……この子の愛撫でこんなにはしたなく反応してしまつて……なんていやらしい……）

今がオンナ盛りであることや、夫との性交渉が依然としてご無沙汰であることを差し引いても、これは反応しすぎではないか。

「先生の乳首……ああ、どんな感触なんだろう……味は、どうなんだろう……」
うわごとのように言うと、乳房を真ん中からくびつた。肉メロンはひょうたん形になり、乳首がグンツと前に突き出る。彼はその先端を口に含んだ。

「はうつ……んああ……はあつ……つくう……」

（あああ、舐められてる……胸の先っぽが口の中に閉じこめられて……んああ、見えないところで舌に弄ばれてる……！）

胸の先っぽは、乳輪のずっと後ろまで口内に招き入れられていた。

興奮で赤みの増した彼の唇が、唾液を漏らしながら乳肌にがっぷりと密着している。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

呼吸は鼻が一手に引き受けているせいで、暴風みたいになっており、露出している乳肌を撫でながら鎖骨まで吹き付けている。

温かく、粘膜でぬめる若牡の内部に包まれていると奇妙な安心感を覚える。それで抵抗心が萎えているせいで、乳首を玩弄される快感は強かった。

「ンフウーツ、ああむ、えろえろえろ、ムフウーツ」

陰核を責められた時を思い出させるやり方だった。唾液でぬめぬめの舌先で天井をつつき、凸凹にそって舐め上げ、くぼみ部分を穏やかにほじってくる。根本から揺さぶり右へ左へと倒し、乳輪の上を転がす。

「あハアアツ……んはアアツ……んん……ツ……」

芯から乳房を蕩けさせるような鮮烈な快感電流が乳玉内部で吹き荒れ、口から漏れる吐息に鼻にかかった嬌声が混じる。

（わ、私……教室で……生徒に胸をしゃぶられて感じてしまっ……）

学校では決して誰にも聞かせたことのない恥声を、こうして無人の教室で上げさせられていると思うと、背徳的な官能を禁じ得ない。

精神を溶かすような危うさ帯びた妖しい甘美感が乳房を包み、心臓にまで触れてきて血の巡りを激しくする。

「ぶぱっ。先生、僕の口で感じてくれてるんですね……乳首がますます勃起して、先

生の顔も……とても綺麗でいやらしいです」

生唾を飲みながら嬉しそうに言ってくる。自分が年上のオンナに快楽を味わわせているという実感を得て、牡としての自信を持っている。そんな感じの言い方だった。そして同時に、憧れの女教師をもっと感じさせたいというニュアンスも含んでいて、禁断の性行為の続行を予感させる。

「んんあ………はああっ………こ、こんなのどこで覚えたの………？ 親戚の人にこんなことまで教えてもらったの？ ……はあ………」

絶頂の余韻に浸っている時みたいに気だるげで淫靡な吐息をこぼしながら尋ねる。

「はい、教えてもらったりもしましたが、本やDVDを見ながら勉強もしました。先生とこうできる時に備えて、バイトでもらったお金で買って、勉強の合間に覚えて………だから、先生に喜んでもらえてホッとしています」

そう言って浮かべた微笑みは、夢を叶えた人間のそれのように自信と満足で一杯だった。

(そんな顔されたら……ますます拒絶できないじゃないの……)

自分が熱烈に求められているということが伝わってきて、キュンと胸が締め付けられた。

ここまで思ってくれ、セックスも紳士的かつ上手にしてくれる男性ならば、独身の

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

女ならばよろめいてしまうのではないだろうか。

流石に、人妻教師も積極的に浮気に走りたいとは思わないものの、彼に対する好意めいたものは感じている。

教師が生徒に向ける類のものではなく、オンナがオトコに向ける性愛混じりの好感である。

(あ……あんなになってる……)

ふと見ると、彼の股間がテントを張っていた。これだけオンナの肌に触れ、愛撫していたのならば勃起しても当たり前前だろう。

彼にしてみれば、必死に努力して蜜時をもぎ取り、憧れのオンナに触れたり喜ばせたりしているという状況なのだ。興奮もひとしおのはずだ。

(でも……この子は私に奉仕を求めるでもなく、強引に本番セックスをしようともしなかったわ……)

女教師と性的に接触している癖に、妙な部分で無欲というか控えめというか、何となく微笑ましい。

「ねえ……」

上擦りのない濡れた声で話しかける。教師が生徒に話す時の口調ではなく、セックス経験豊富な年上が、童貞に喋りかけるような声だった。

「オチンチンがそんなになっていたら苦しいでしょ？ 言ってくれれば先生がラクにしてあげたのに」

体操着の裾を下ろしてバストを軽く固定させると、静かに跪く。足を開いてお尻を床に着け、上から見下ろせば逆Wの形に見える体勢になる。

「せ、先生なにを！？」

投げ出される太腿のムッチリ具合。ムニユリと盛り上がりながら小さなブルマのバックからはみ出て後ろに突き出る尻たぶの淫らな肉感を見下ろす彼は、狼狽え声をあげた。

「いいから、先生に任せて頂戴。あなたは、そのままでもいいから。私が全部してあげる」

体操着姿でのセックスなど夫ともしたことはない。

そんなはしたない痴態を見られていると思うと強い羞恥心を感じて胸が熱くなる。

だが、人妻教師は戸惑う彼をあやすように艶然とした微笑みを浮かべながら上目遣いで言った。

その凄絶な色気に、彼は金縛りにあつたように硬直する。

ガチャガチャ、カチャンツ……スウツ……。

ベルトを外すと腰元に指を差し入れて、下着ごとズボンを下ろす。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

ブルン！ と勢いよく若牝の肉棒が飛び出した。

「あ……………！」

リードしていた人妻教師が思わず目を丸くした。

(何これ……………すごい……………)

童顔の見た目とは裏腹に、逸物は実に牡らしいものだった。

夫や結婚前に付き合った大人の男と比べても遜色ないほど長く太い。へそ近くまで
反り返る様は威風堂々としていて、こちらが見下されている気にさせられる。

先端の肉塊に皮が被っているが、皮の輪郭は野生の椎茸みたいだった。それほど亀
頭が逞しいのだ。

皮の色は薄く黒ずんでいるものの、まだまだ肌色が濃く初々しいと言える。この点は、
あどけない彼の持ち物らしいと言える。

(匂いも……………汗混じりの甘酸っぱい感じで……………いくらペニスが間近にあるからって
こんなに濃厚だなんて……………嗅いでいるだけでクラクラしちゃう……………)

処女でなく、オトコのうま味を知る身なので、上質の牡棒を前にするとなついついは
したなくなってしまう。

鼻腔に入り込んでくる牡臭に無意識の内に意識を傾け、瞳には予想以上の逸物の偉
容を映している。

「ごくっ……………」

勝手に喉が蠢き、生唾を飲み込んでしまった。

羞恥で熱くなっていた胸がトクトクと鼓動を早めていて、一緒に体温まで上がってくる。

「あああ……………僕のオチンチン、変ですか？ おかしなところがあるんでしょうか……………？ やっぱり皮被りだから……………」

瞬きも忘れて凝視されていたことに不安を感じたらしい。消え入りそうな声で尋ねてきた。

「え……………いいえ、あなたのオチンチンはすごく立派よ。皮を被っているけれど、皮を伸ばさないようにオナニーをしたりすれば解消できるから問題はないわ。でも、お風呂では皮を剥いてよく洗わないと駄目でしょうね。いつもこんな風に皮を被せているとバイ菌が増えやすいから」

「は、はい。僕も、お風呂に入るときはよく洗うよう心掛けています……………そう親戚に教えられていたので……………あ、あと……………僕のオチンチンを褒めてくださってありがとうございます。先生にそう言ってもらえると嬉しくて自信も湧いてきます」

彼はようやく安堵したようで、ホッと息を吐いた。

「あの、これ使ってください……………」

そう言うと、胸ポケットからウエットティッシュを取り出した。

「あら、用意がいいのね」

意図を察してからかうように微笑む。ウエットティッシュを受け取ると中身を出し、それでペニスを清拭する。

（熱いわ……顔を近づけるだけで熱気が顔に当たって……ひんやりしているウエットティッシュもすぐにぬるくなる……オチンチンの硬さと重たさも伝わってくるわ……ああ、すごい……）

丁寧にペニスの表面を拭いていると、熱湯の湯気みたいな熱感とずっしりとした重量感が手に伝わってくる。流れる血潮の勢いも強く、青い血管がドクドク言う。

拭い終わったウエットティッシュを見ると、ほとんど汚れはついていなかった。会う前に入浴でもしてきたのだろう。

感心しながら先端に指を伸ばす。

「ちよつと痛いかも知れないけど我慢してね」

「は、はい……っう……！」

亀頭の中腹辺りを指で摘み、カリの裏まで皮を引きずり下ろした。

（こっちも凄いわ……）

露出した亀頭は赤紫色の強いバラ色で、まだまだ初々しいと言える色合いだった。

だが、傘がグンツと張り出した亀頭は、ビーチパラソルや槍の穂先を連想させるもので、とても〇〇の持ち物とは言えない立派さだった。

「なるべく丁寧拭くけど、痛かったら遠慮なく言うのよ？ 先生、あなたを痛がらせるのは嫌だから」

「はい、お心遣いありがとうございます」

慇懃に礼を言った生徒の亀頭を、新しいウエットティッシュを纏った指で静かに清める。

反り返るペニスの根本を掴んで少しだけ手前に引き倒し、濡れ紙でくるんだ指を力りに接地させる。

「うっ……！」

掴んでいる指を振りほどかん勢いで勃起が弾んだ。脈動する勢いも瞬間的に跳ね上がり、その激しい振幅が手の平に響いてきた。

（じかに触られて興奮したのね……それにしても、反り返ろうとする力が強いわ……本当に逞しい……）

肉棒の雄々しさを実感すると股間がジュンツと疼いた。

その心地よさを無意識の内に噛みしめながら、カリから尿道口までをシュツ、シュツと繊細に雑巾がけしていく。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

(ああ、すごいオチンチン……拭いているだけなのに、こっちまで興奮しちゃう……アソコが熱くなって……濡れてしまっているのが自分でも分かってしまうなんて……こんな感覚久しぶりだわ……)

鼓動はトクントクン高まって、清拭するペニスもどんどん魅力的に見えてくる。

皮の繋ぎ目付近を拭く時には、ペニスがひどく敏感に反応して、一拭きする毎に力強く反り返ろうとしたので苦勞させられたが、嫌悪感よりも淫らな好感を感じてしまった。

「ううう……ああ……」

「どうしたの？ 痛かった？」

「い、いえ……少しも苦しくは……でも……オチンチンが……亀頭が熱くて……気持ちよくて……!」

拭き易い部分を終え、今はカリの裏側に移っている。ウエットティッシュを着せた指先で、皮と亀頭冠の接触面をほじり、なるべく奥まで拭いている。

苦痛に耐えるような顔で甘く呻く彼の亀頭は何度もビクビク振動し、竿の熱さも熱湯みたいだった。

ぷくう……トロ……ッ。

やがて鈴口に滴のドームが形成された。その粘い汁は亀頭の震えをきっかけに、長

く糸を引きながら床に垂れる。拭いている間中溢れてくるので、まるで粘液の雨でも降り注いでいるかのよう。

「ああ、先生ごめんなさいっ……汚い汁を垂らしてしまっ……ああ……先生が拭いてくれているのに……嫌われちゃう……どうしよう……先生に、汚らしい男だっ……軽蔑される……ッ」

おろおろ狼狽え、泣きそうになっている姿は、成績と引き替えに女教師の身体を求めてきた大胆な男子生徒のものとは思えない。

（胸を揉んだりクンニでイカせたりしてる癖に、本当に、妙なところで子供っぽいんだから）

怒りや呆れといった感情は浮かばず、代わりに母性本能めいた温かな気持ち湧いてくる。

「大丈夫よ。先走り汗なんて、男なら誰でも垂らすものじゃない……そんなの先生は気にしないわ」

そう言うと、粘液を滴らせる鈴口に優しくキスをする。嫌な顔一つせず、まるでウブな恋人を導くかのように魅惑的に微笑みながら。

「ん、ちゅっ……チュプ……ッ、んふうう——……チュル……ッ……んっ、ごくっ……んふう」

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

細い頬をへこませると同時に唇を窄めて思い切り吸飲し、先走り汁を嚙下する。鼻で息を継ぎ、頬を艶っぽく紅潮させながら、献身的に若牡の性汁をすすり続ける。

(はああ……熱いわ……トロツとして、舌に伸しかかってくるような感じで……そして苦しよっぱくて……)

口の中いっぱい広がる汁の味も匂いも、食べ物では決して味わえない牡汁ならではの物なのだ。

そしてそれは、オトコとのセックスの味を知るオンナには淫靡な媚薬に等しいものでもある。

(先っぽを咥えていると……竿の反り返ろうとする力が唇を引っ張り上げようとする強い力を凄く感じるわ……ペニスの重さと硬さ……弾力が強くてプリプリした亀頭の感触も唇に伝わってきて……)

咥えていることで口内や舌に感じられる牡棒の存在感は、頭がクラツとしそうな位に強烈だった。

(身体がますます熱くなって……アソコがしきりに疼いて……恥ずかしい汁もたっぷり出ているのが分かる……はああああ……)

喉に軽く絡みつきながら胃の中に落ちる汁は、熟れた女体を発情させ、股間を芯から熱くする。

鼻息が荒くなり、頬がへこみっぱなしになる。尿道口から先走り汁を吸う勢いが増し、濡れたガラスに指を滑らせる音に似た、甲高くて淫らな吸飲音が教室内部に響き渡る。

「あああ、先生……柗先生っ……！」

彼は堪らなそうに腰を小刻みに痙攣させ、太腿の側に垂らしている手の平をギュツと握りしめる。

「ちゅぷんっ……はああ……あなたのカウパー、とつても美味しかったわ……んんっ……もつと気持ちよくしてあげるわね。先生に、精液を飲ませて……あ……むっ」
上目遣いで艶然に微笑むと、汗で額に貼り付いた髪の毛の束を軽く梳き、再び若い亀頭と見つめ合う。

上下の唇を大きく離す。真っ白で並びのいい歯が覗き、上下の唇、口内の天地の間に唾液と先走り汁の粘糸の柱が幾つも立った。

喉奥からやんわりと吹いてくる熱い吐息を浴びせながら、亀頭をすっぱり呑み込んでいき、最後にカリの裏と唇の裏を密着させた。

（凄くビクビクして……膨らんで……今にも射精しそう……）

鼻の先で伸びる牡莖も一回り大きくなっていた。這いずるように浮いている表面の血管もドクンドクン脈動し、肉棒の淫らな律動に負けない勢いを見せている。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

「ちゅううう、じゅむつ、ジュポ〜〜ッ、ジュブブツ、ジュップ! ジュップ!」
カリ首と尿道口までの範囲を唇だけで研磨する。
ぬるぬるの唾液をたっぷりかけながら頬を窄め、唇と口内粘膜で包み込んだ亀頭を
一時も離さない。

淫靡な水音を奏でながら頬を窄める顔はますます淫らに紅潮していき、照明を浴び
て卑猥な煌めきを見せていた。

体操着やブルマから伸びる手足も同様だった。パンパンに膨れた乳房などは体操着
の胸元をギュウギュウ押し上げており、乳首も一目で分かる位に勃起している。

後れ毛を揺らしながら頭を前後させていると、乳房がゆっさゆっさと重たげに揺れ、
勃起した乳首が中空に白い軌跡を描く。

胸が揺れるほど乳房や乳首が綿の布地と擦れ、ピリピリとしたもどかしい快感電流
が送られてくる。

もっと強い刺激が欲しいものの、まさか自分でオナニーを始めることもできない。
じれったい刺激を紛らわそうとして、奉仕にますます熱を込める。

「ちゅぽん…はああ…どう? 気持ちいい? 痛かったりしない?」

生徒思いの教師とも恋人を気遣う女ともつかない態度で尋ねる。

口を離れた瞬間、勃起は唾液の滴と先走り汁の飛沫を撒き散らしながら、空気を切

ってへそまで反り返った。止まってもビクビクと力強く震幅する。

「はい、とても気持ちいいです……ああ、先生にフェラチオをしてもらえるなんて夢みたいですよ……一生の思い出です……！」

桃色に色づく手足、淫らに揺れる乳房、淫靡な表情で牡棒に献身する人妻教師の貌。それらすべてを独り占めし、熱視しながら肉奉仕を受けていた若牡が感嘆の溜め息をつく。

（そこまで言われたら……照れちゃうじゃないの……）

彼の感激する様子には微塵も嘘臭さを感じない。オナナとしての自分に優しく接してくれた若い男の子なので、明け透けに喜ばれるのはくすぐったかった。

彼の賞賛は胸にじゅんと染み込んで、もつと気持ちよくしてあげたいという気持ちを湧かせる。

（でも、こんなことは本来許されないこと……これで喜んでくれているのなら、射精に導いて……精飲もしてあげたらきつと満足してくれるはず……早くやってこんなことは切り上げないと……）

久しぶりにオナナとして振る舞い、昂れたことは名残惜しく、できることなら若いペニスを啜え込んで絶頂をたっぷり味わいたいところだが、自分の立場を考えれば欲望に流されてしまうわけにはいかない。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

生徒への口淫を再開する。

(けれど、自分がオンナだっと思って思い出させてくれたことのお礼はしてあげなくちゃ……たくさん、気持ちよくさせてあげるわね)

唇でカリの裏まで包み込み、今度は竿にも手を伸ばす。

シュルリ……シュルリ……シュツ……シュツ。

窄めた頬の裏と唇でくるんだ亀頭にピストン奉仕をしながら、空いている手で肉竿を扱く。

(ああ……竿も亀頭みたいに熱く堅くなつて……実際に触れてみると心臓みたい
にドクンドクン言ってるわ……はああ、それに鉄の棒みたいにとても重たくて……すご
い……これが若い子のペニス……ああ……)

手の平に勃起ペニスの熱感と重量感が伝わる。力強く脈動される度に、手の平全部が揺さぶられ、その振動は胸の奥をも甘く揺すってくる。

勃起を握る手がじゅんと甘く痺れだした。

口内にじわっと放出される先走り汁と亀頭の牡臭も、口中や舌だけでなく頭の中まで極彩色の官能で染め上げる。

「ンフーツ、ジュポオオオツ、ンフウー、チュプツツ、チュプツ……ツツ、ぷはっ、はムツ、レロレロレロオオオ」

頼み込んで人妻教師とコスプレH！



第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

(すごい……こんな私にオンナを感じさせてくれるなんて……ああ……この感覚久しぶり……あの人とセックスレスになってから初めて……)

手で扱き、口でしゃぶっている内に、オンナとしての淫らさが咲き始め、舌も情熱的に動き出す。

亀頭の穂先を正面からベロベロ舐め、鈴口を浅くほじくる。張り出したカリ首の表も裏も限なく舐め回し、頭の中に形がイメージできるほど細部までねちっこく唾液をなすりつける。

性生活の欲求不満が淫らに爆発していた。先ほどの合理的な思考は少しずつ頭の隅に押しやられ、逞しい牝に奉仕する牝本能が幅を利かせる。

「ああああ、先生の綺麗な手が僕のオチンチンを扱いて……口で先っぽをしゃぶって……うああ、し、舌がカリを這って……くう、ああ、そこだめ、ほ、ほじらないでえ！」

だめと言いつつ逃げ出そうとはせず、牝の本性を見せ始めた人妻教師の肉奉仕を甘受する。

「ひもちいい？ へんへいのへらひほ、きもひいい？」

汗の膜で顔を焔めかせながら、口呼吸する合間に尋ねる。

「は、はいっ……んああ、先生のフェラチオ最高ですっ、こんなのしてもらって幸せ

です、ああ、オチンチン気持ちいいッ、凄く熱くなってます、芯から燃えてるみたいでっ、くうっ、ああああ、腰の中も熱くなって、ああっ、出そうっつ！ 精液が飛び出そうだ……ッ！」

寒さに震えるみたいに腰と太腿を痙攣させながら、切迫した声で叫ぶ。

（ああああ……はああああ………嬉しい！）

甘美な落雷で打たれたみたいだった。

自分もひどく興奮している時に聞かされる、奉仕する牡の喜び台詞は、それほど嬉しかった。

陰部が気持ちよく熱くなり、ふしだらに潤み、胸がトキメイてしまうのだ。

（そうよ……私は、こうやってあの人に喜ばれるのが大好きで……けど、あの人とはずっとご無沙汰で……だから、褒められてこんなに嬉しいのよ……！）

自分がどれだけ餓えていたのかを自覚させられ、欲しかったものを与えてくれる若牡への好意が大きくなる。

誰でもよかったわけではない。彼が自分勝手にガツつかず、優しく丁寧に触れてきてくれ、そして十分にオスを感じさせる素養を持っていたから、こんなに喜んでしまっているのだ。

ある意味、ふたりの相性はいいと言える。

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

「ジュブブブ〜〜〜ツ、フーツ、んふう、あゝむ、レロレロレ、チュム……チュ
ツ〜〜〜ツツ！」

押さえ難い官能感情に背中を押されながら、衝動のままに熱烈に口奉仕を行う。

「はあっ、はああああ、あああ、せ、先生、もうだめ、出るっ……あああ、は、離れ
て、もう射精しちゃう……このままだと、うツ、せ、先生の中に……んあああ！」

手と口内に包まれているペニスは燃えているように熱くなり、激しく脈動している。
身体がググツと膨らんで、亀頭などは噴火寸前だった。

彼は憧れの女教師の口の中で射精することは自重しようとしているようだが、
(いいのよ、出して、ああああ……先生の口の中で絶頂して……あなたの精液を先生
に飲ませて……！)

そんな意志を込めて上目遣いで見つめながら、引き剥がしにかかられても剥がされ
ないようにガツツリと若いペニスに食らいつく。

「あああ、せ、先生！ 本当にだめ、んあああ、しゃ、射精しちゃう……！」

吸飲しながら亀頭正面をベロベロ舐め回すと、彼が背筋を仰げ反らせた。吐き出さ
れた先走り汁にトロミが増え始めている。限界が近いのだ。

「ジュプツプツ、ジュル〜〜〜ツツ、ンフーツ、ンフーツ、レロレロ、
プジュツ——！ ジュブブブブ——ツツツ！」

射精するべく吸い上げ、後れ毛を揺らしながら頭を前後させ、獣の唸りめいたやましい鼻息を繰り返し、舌舐め、竿扱きを繰り返し続ける。

桜色に色づいたうなじから、熟れた牝ならではの甘酸っぱい香りが盛んにくゆり、ふたりを包み込んでいる。

興奮してパンパンに張りつめた豊胸は、タイトな体操着を内側からグイグイ押し上げながら、勢いの強い振り子みたいにブルンブルン上下に行き来していた。

ブルマから柔肉をはみ出させているお尻は、尻たぶをゆさゆさ揺らしながら物欲しげに左右にくねっている。これは身体の勝手な反応だが、人妻教師がオナナの部分にオトコを欲しがっている証拠だった。

憧れのオナナの魅惑的な姿を、目で、耳で、鼻で、そしてペニスで感じる若牝はオトコの興奮をますます高め、射精寸前で先走り汁をだらだら垂らす分身を淫らにビクつかせる。

（あああ……熱いっ……硬いっ……重いっ……もう限界なのね……さあ、いっぱい出していいのよ、先生に吐き出してちょうだいっ）

人妻なだけに、男の限界時の反応も心得ている。悟った女教師は、レロレロと先端を舐めながら肺活量の限りバキュームした。

ドビュ~~~~ツツツツッ！ ビュルルルッ、ドクッ、ドクッ！

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!

「ああああああ〜〜〜!」

「んむう——っ、んぐんぐんぐんぐんぐんぐん、んむ、れる、ンフーツ、れろろ、んぐんぐ、フウーツツ」

若牡が絶頂に叫び、受け止める人妻教師は手慣れた風に吐精液を処理する。

喉奥にべったり貼り付いた第一射を何度も喉を蠢かせて嚥下した。歯、歯茎、頬の裏、口蓋に飛び散り、へばりつく粘液塊をやり易い場所から舌で掬い、唾液を混ぜ、飲み下す。

(喉に絡みついてなかなか落ちていかない……ああ凄く濃い……口の中で栗の花みたいな男らしい匂いがプーンと充満して……クラクラする……)

ネバネバの粘滴を舌で掬う心地良さや、味と重量感を味わわれる甘美感、喉に落とすして胃に送り込む度に頭がぼうつとする愉悦が、膣内をキュンキュン疼かせる。

牝心を満たしてくる行為に、人妻教師はうなじや額にかかる髪をかきあげながら没頭する。

顔は茹で上がったみたいに見たいに真っ赤になっていた。きめ細かい美肌も赤熱しており汗の膜でしっとり潤い、光を浴びて七色に輝いている。

「あ……あああ、せ、先生が僕の精液飲んで……飲んでくれてる……あああああ!」
尿道口に残っている分も搾り出そうと思ひ、脈動する竿を手で扱きながら思い切り

第二話 頼み込んでブルマ姿でH!



「は、はい……ありがとうございます……先生」

まだ口淫射精の余韻が抜けていないのか、夢見心地な風に彼は返事をした。

その日の夜。

「あなた、お帰りなさい。食事と入浴の支度はできているわよ」

夏子はいつかの薄着姿になって夫を出迎えた。

今度は事前に入浴を済ませ、若い頃に夫がいい匂いだと言ってくれた香水を振りかけて自分の魅力に磨きをかけている。

自分の女体をPRしている妻に夫はたじろいだ様子だったが、すぐに食事がいいと告げた。

（今夜は引き下がらないわよ）

昼間、前回以上に過激なことをしてしまったので、罪悪感と負い目も前の時以上に深く痛かった。

夫に抱かれることで癒されることを期待し、夫に抱かれて自分も淫らに献身すれば不貞も許される気がして夫婦の情交を求めているので、妻はまだ諦めていなかった。

そして、夫婦が床につく時間になった時。

「あなた……ねえ……今日は久しぶりにいいでしょ？」

レース作りの黒いランジェリーに身を包んだ妻が、寝室の入り口から夫を誘う。

先に寝室に入ってベッドに潜ろうとしていた夫は身体を硬直させ、暫く妻の美体に見入っていた。

(もう一押しね)

脈ありと判断し、ゆっくりと夫に近づいていく。

「ね、あなた……お願い……」

目の前まで近づいて、ルージュが塗られて艶が増した唇を官能的に動かす。

セックスを望むオンナの目で夫をじっと見つめながら、返事を待つ。

だが、返された言葉は「すまない、疲れているんだ」だった。

「そう……よね……ご免なさい、わがまま言って」

できるだけ明るく微笑もうとしたが、悲しさが滲んでしまった。

夫は気まずそうに顔を背けると向こう側を向き、それっきり妻を見なかった。

(今日はだめでも明日にはきつと……)

そう思って夏子も床につく。

ところが、次の日もその次の日も、同じように拒絶されてしまった。

妻を遠ざけているというよりは、性行為に恥ずかしがっている風に見えたので、夫

頼み込んで人妻教師とコスプレH！

婦仲が冷えたのだと心配する必要はなさそうだった。
しかし、癒されない罪悪感、痛み続ける古傷のように夏子の心に居座るのだった。

第三話 頼み込んでセーラー服姿で！

夏休みの最初の日曜日。

グラウンドでは運動部員たちが汗だくになって練習に励んでいるものの、校舎内には人影はなかった。

「今度はこれを着ろっていうのね……？」

ふたりきりの教室で、柊夏子は紙袋を渡してきた戸部渡に尋ねる。

顔も声も引きつっているのが自分でも分かった。

「はい、お願いします！」

「これも、バイトでもらったお給料を使って……通販で買った物なのかしら」

彼は勢いよく頷いた。

今度のコスプレ衣装はセーラー服だった。

上着は白を基調としていて、カラーと袖は紺色をしている。プリーツの多いスカートも黒に近い紺色だった。

色鮮やかな上にパリツとしているので清楚な印象の強い服だが、若い女の子ならともかく、自分が着たらまるつきりイメクラだ。

しかし、突き返すわけにもいかない。

体操着の一件と同じ具合に、秘密の個人授業を約束してしまったから。

今度は、男女合わせた総合でトップテンに入るという条件だったにもかかわらず、彼は乗り越えて見せたのだ。

「だめ……ですか……？」

彼が不安そうに言ってくる。

(う……またそんな顔して……)

真剣な面もちだった。だめで元々と思っっているような雰囲気もあるが、正々堂々と試練を乗り越え、健気にコスプレ衣装を入手したことを思うと、それにつけ込んで断るのは気が引ける。

「分かったわよ……着ればいいんでしょ、着れば……」

恋人に拗ねるみたいに言い放つ。すると、彼はパアツと表情を明るくした。

「ありがとうございますっ！」

(まったく……年増趣味といい、体操着やブルマの件といい、オヤジ臭いんだから) 胸中でぼやきつつ、口を開く。

「それじゃ、向こうを向いていてくれる？ 着替えるから」

ところが、今回は言い返してきた。

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

「先生が着替えているところを見たいです……見せてください……!」
「はあ……!?!」

彼は、また真剣な眼差しでじっと見てくる。

「あ、あのねえ……いくらなんでも恥ずかしいじゃないの……」

「お願いしますっ、この通りです!」

土下座までしてくる。彼は一瞬の躊躇いもなく、床に額を擦りつけた。

「ちよ、ちよつと馬鹿な真似はよしなさい。たかが私の……こんなオバサンなんかの着替えを見るために……」

そんな行動を取られるとはまったく予想していなかっただけに、本当に驚いてしまった。こんなにびっくりしたのは何年ぶりだろうか。

慌てて床に膝をつき、顔を上げるように促す。

だが、彼は頑として動かなかった。普段ならば何事も二つ返事でやってくれる従順で真面目な生徒であるのに、今は強情を張ってくる。

「分かったわよ……見ていていいから頭をあげなさい」

「ありがとうございます!」

認めた途端、勢いよく顔を上げて威勢よく謝辞を述べてくる。

(まったく……私の……こんなオバサンの着替えをそんなに見たいだなんて)

胸中で呆れ混じりに嘆息する。

(でも、ちよっと嬉しいかも)

夫もオンナとして見てくれなくなっているだけに、くすぐったい気もする。不快でない性的な行為を重ねた相手だけに、気が緩んでいるからなのか、そんな感情も湧いてくる。

「そんなに見たいのなら、じっくり見ていなさい……」

正座し、熱烈に凝視してくる彼の目に羞恥心を覚えながらブラウスのボタンに手をつける。

(ギリギリした目で見てくる……私はこの子の先生で、家に帰れば人妻なのに……着替えを見られているのだわ……)

湧いてくる羞恥心は嫌なものではなかった。心地よく心臓の律動を早めさせ、身体を気持ちよく火照らせる。自然にしまった溜め息は熱くて重たかった。

見られていることを意識しながら、ボタンを一つずつ外していく。

第三ボタンまで外すと、ブラジャーごと胸が転げ出た。

「あ………！」

彼が目を見開く。それもそうだろう。普段、ストイックな出で立ちをしている女教師が、派手な下着を着けていたのだから。

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

(驚いてる……ああ、オチンチンも勃起して……興奮してくれてるのね……)

身に着けているのは、牡を挑発して欲情を促すような真紅のレースブラだった。カップがマイクロビキニじみているので、豊満な肉メロンの乳肉がムツチリとはみ出しており、並ぶ双乳は押しくら饅頭しながら胸元に深い谷間を作っている。

彼が喜び驚いている様子は、恥ずかしさを我慢して準備したオンナとしては嬉しかった。

自分の魅力に自信が湧いてくる。

脱いだブラウスを脇に落とし、今度はウエストに手をかける。ベルトを外し、タイトスカートと細腰の間に指を差し入れ、ゆっくり下ろす。

スローモーションで太腿をくすぐり、ふくらはぎを滑り、スカートが床に落下する。

「ああ………」

彼が感嘆の溜め息を漏らす。

茶色がかかったパンティストッキングの中にあっただのは、パンストごしでも分かるくらいに鮮やかな真紅のショーツだった。ブラとお揃いのレース造りなので、見た目のバランスはいい。

(……………)

今日という日にそんな扇情的な下着を着けてくることは、オンナとして心を開いて

いるサイン以外の何ものでもないと分かっているし、彼もそれに気づかないほど鈍感でないことも分かっている。

教師として、人妻として失格の行為だ。

「すごく綺麗です……先生……」

「ありがとう……」

でも、やはり嬉しかったし、後悔もない。心そのままにこんな風にしてよかったと思う。これほど堂々と見せることになるのは予想外だったが。

(あの人にもこんな風に褒めてもらえたらいいのだけど……)

ふとそんなことを思う。若い男にオープンに——端的に言えば甘えてみたいと思っ
てはきているものの、夫への気持ち枯れたわけでもないのだ。

幼児みたくに嬉しそうな顔をして見つめる彼の前で、パンストとヒールも脱いだ。
不要な物は脱衣したので、用意されたセーラー服を着る。

スカートを穿き、上着を着る。太腿の高い位置までくる真っ白いニーソックスで足を覆い、学生用の靴を履く。仕上げは真っ赤なネクタイだ。偶然にも、下着と同じ色をしている。

「これでいい？」

彼は力強く頷いた。年甲斐のない格好にまったくがっかりしていない。前回の時に

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!



勝るとも劣らないキラキラした目をしている。

欲情もしていて、ズボンの股間の盛り上がりようはまるで山だった。

「とても素敵です……ああ、可愛すぎる……」

そんなに似合っているのかと不思議に思いながら、絶賛された姿を見回してみる。

(やっぱり、どう見てもイメクラだわ……なのにこの子ったら……)

心の中でそっと苦笑いをして、彼に尋ねる。

「これからどうしたいの？ あなたのオチンチン、もう勃起してるけど、またおしゃぶりにして欲しい？」

「ああ、すみません、先生があんまり素敵だったのでつい身体が反応して……でも、こっちはまだ大丈夫ですから……それよりも……その……」

隠すように股間に手を当て、真っ赤な顔で口ごもる。

また、何か恥ずかしいことをさせようとしているのだろうとは感じたが、具体的にどんなことを望まれるのかは見当がつかない。

「言いたいことは口にしてもらわなくちゃ分からないわ。おっぱいを揉んだり、フェラしてもらったりしておいて、今さら遠慮することもないでしょ？」

水を向けても彼は恥ずかしそうに口をつぐんでいたが、辛抱強く待っているとようやく言ってくれた。

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

「あの……その……き、キスを……キスさせてくれませんか……？」

「キス……？」

言われてみればしたことがない。キスよりも過激な行為は行ってきたものの、恋人ならば最初に行うようなこれはしていない。

(キス……か……)

意識すると少し身体が強張った。

カップルならば初歩的で頻度の高い性的なスキンシップであるだけに、キスを許すことで自分が彼と相思相愛の恋人同士だと彼に自覚させ、自分も認めることになる気がする。

そうなれば完全に浮気であり、生徒と教師が手に手を取って許されない一線を越えたことになる。

(また……真剣に見つめてきて……)

眼差しに気付き、思わず目と目を合わせると胸の奥がじいんと甘く痺れた。

もしも、最初に求められていたら拒絶したかも知れないが、今は拒否したいという気持ちよりも、応えてもいいという感情の方が強かった。

(この子のこと、ただの生徒とは思えなくなってきた……対等な恋人みたいに思っている……私……)

社会的に見れば彼はただの学生で、独立していない半人前だ。独立独歩の社会人は対等ではない。

しかし、彼は自分の心を心地よく満たしてくれる。褒めてくれたり、優しくしてくれる。

こうして公序良俗に反する約束を取り付けて、自分の劣情を満たすことはしていても、乱暴を働いたり、傷つけたりということはしない。

そんなところは魅力的だった。

誰にも知られない場所で、他の人間に秘密にして、こっそり情交を行ってもいいと思えてくる。

「……………いいわよ……………先生とキス、しましうか」

(……………言っちゃった……………あの人に構ってもらえない時に、優しくしてくれる子が現れて……………私はこの子に甘えちゃっているんでしうね……………)

無邪気に喜ぶ彼を眺めながら、胸の中で罪悪感と自分への嫌悪感を覚え、ひそかに溜め息をつく。

「そ、それじゃ……………失礼します……………」

彼が歩み寄ってきた。

「ええ……………優しくしてね……………」

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

邪魔になるので眼鏡を外して脇に置き、彼を待つ。

「先生の唇……瑞々しくてプルプルしてますね……色もとっても綺麗です……素敵ですよ……」

彼は静かに唇を近づけてきた。

「んっ……」

半開きの彼の口から生温かい呼気が吹いてきて、こちらの唇を撫でる。

今日もミントの匂いだった。口臭だけでなく、体臭や髪、身なりもいつも通り整っている。憧れの女教師と淫らなことをするのだからと、気を遣ってくれたのだろう。

「んむっ……んっ……」

唇の前面同士が密着する。

女の柔肌めいた柔らかさだが、芯が入っているように弾力も強い。

唇が触れ合う部分から彼の体温が伝わってきて、じゅんと甘い痺れも広がっていく。乳房を愛撫されている時とはまた違った感覚で、マスタードの辛さみたいにすぐ消えていく。

睫が触れ合うか触れ合わないかの距離で目が合う。

恥ずかしそうでありながら、嬉しそうでもあり、彼の頬は上気している。

ウブな反応に釣られたのか、こちらまで頬が火照ってくる。きつと赤面しているだ

ろう。セックス経験の豊富なオンナとしては少し気恥ずかしい。

「あむっ……んむっ……うん……ちゅむ……」

彼がさらに動く。肩を抱き寄せながら、ついでにキスを繰り返して来る。

唇を軽く押しつけられる感触が連続し、仄かな痺れが途切れることなく唇中に拡散していく。

彼の抱き寄せ方は大胆で、ふたりはぴったりとくっついていていた。

豊満な胸は男子の胸板に当たってムニユリとひしゃげている。

キスで身体が動いたたびに乳首が擦られるのですぐにコリコリになり、彼の胸板で転がされる格好になっていた。

男子の脇腹が気持ちよさそうに痙攣するのは、胸板に豊胸をグイグイ押しつけながら、勃起乳首にクリクリと刺激されて気持ちいいからだろう。

こんもり盛り上がっている恥丘は、間に布を挟んでペニスとべったり触れ合っていた。一目で分かるほどテントの柱になっていた逸物の熱と硬さが股間に生々しく伝わってくる。

秘裂の浅い部分に先端がめり込んで小陰唇を微細に擦られるのはもどかしい快感で、まるで焦らされているみたいだった。

「あむっ、チュムツ、はあっ……んむ、チュプウツ、んっ……」

股間に走る快感から意識をそらそうと、キスを過激にする女教師。

彼の上唇を唇で噛み、吸引する。唇のぬめりが彼のそれとの吸着具合を増させ、吸い上げる感触はまるで亀頭に吸い付いてバキュームしているよう。

芯が入っているみたいに硬い亀頭に比べ、こちらの方が柔らかさが強いものの吸い応えはなかなかだ。

快感を感じているのだろう。彼の口内で唇がピクピクしているのが伝わってきて、感じさせている実感を覚え、行為をもっと続けてあげようと言う気にさせる。

「んっ、チュプツツ、ぷはっ、んんっ、はむっ、チュ〜〜〜ツ、んふううう……ぷはっ」

上唇だけでなく、下唇も食んで吸う。鼻の辺りに吹き付ける鼻息が荒く熱く湿っぽくなってくる。

自分も同じだろう。夫だけが感じられるはずの感触を、目の前の男子にも感じさせている。

そう思うと、唇を食み吸う甘い快感とは別に心臓をゾクゾクさせる背徳感を感じる。自分は浮気しているのだと思うほど、それは濃厚になってくる。

「んんっ、んふうっ、あ……んう、うんふううう……」

やがて、彼が同じことをしてきてくれた。性行為でしか吹かせないような鼻息をぶ

つけながら、上唇や下唇を唇で噛んでチューツと吸ってくる。

強引なところはまったくないので、夜のベッドの上で穏やかに愛撫してもらっているようにリラックスできる。

(んんっ、ああ……はああ……唇のぬるぬるで噛まれて、唇を吸われるのが気持ちいい……んはああ……)

唇を食まれるとじわつとした仄甘い快感が唇に広がり、吸い上げられると意識が白んで身体の芯がじんわりと甘美に痺れる。陰核を吸われる快感を何倍にも薄めたような甘さだった。

じゅぶぶ……っ、ごくっ、ちゅぷ……っ、んく。

唇を吸われた拍子に唾も彼に吸い飲まれている。喉が前後動する振動が唇に伝播して、喉仏の動く様子が瞳に映る。

(ああああ、飲まれてる……私の唾をごくごく……)

彼は喜んで飲んでいる。嫌な顔をするどころか、飲み終わるとカラカラの喉を大好き物のジュースで潤した後みたいに、目尻を弛ませて恍惚の溜め息をつく。

「はああ……先生の唾、砂糖水みたいに甘くて美味しいです……唇もプルンプルンで、唇で挟む感触が堪らないです……ああ、ムチュツ、チュプツツ！」

夢中になって唇を優しく貪りにくる。

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

(私の唾を美味しいって言うてくれて……ああ、もつともつと……飲もうとしてくれて……!)

求められている実感が官能的な嬉しさを感じさせ、快感を強く濃くし、もつと過激なキスをしたいという衝動が湧いてくる。

「えろお……ああむうつ、チュル……チュル……ツ、んふうつ、はあああ、あむつ、チュ……ツ、プチュ……ツツツ、んああ」

舌を使って彼の舌を引きずり出し、ペニスを咥え込むみたいに唇でがっしり噛むと、思い切りバキュームする。

甲高く淫らな水音が広い教室内に響き渡った。

二度、三度と繰り返していると、吸われている間、唇でねつとりと挟まれている舌が、フェラチオをされている肉棒みたいにビクビクしているのが分かる。

(はあああああ、アソコに触れてるペニスもビクビクッとして……ああ、アソコの入りが擦れて……!)

舌の振幅と連動するように、股間に浅く食い込んでいるペニスも気持ちよさそうに痙攣し、その体積を増させている。

キスで興奮し、感度と表面積を大きくしている小陰唇が微細に擦られ、クリトリスに逸物の熱感が伝播する。性器に伝わってくるずっしりとした重量感が、膣内をズク

ズクと疼かせた。

否応なく淫らな気持ちにさせられて、ペニスをもっと擦りつけたくて、相手の股間に自分の股間を押しつけてしまう。

(んあああ、気持ちいい……気持ちいい……)

桃色の感情に蹴り飛ばされるように、女教師の舌が生徒の口内でのたくる。

歯や歯茎、頬の裏や口蓋など、口の中の至る所を舐め歩く。舌ともはしたなく触れ合った。上、裏側、側面と自分の舌を擦りつける。

学生と自身の唾液の混ざり汁が口内に流れ込んできたら、迷わずゴクンと嚥下した。はあはあと呼気と鼻息をぶつけ合い、唾液を飲み合い、舌と口内を舐め合う快感は、性器を擦り合う快感ほどの鮮烈さはないが、疲れ果てた後にぬるま湯に浸かっている時や、くたびれ過ぎて泥のように眠る夜みたいに、心の底からうっとりさせられる。

だがそれで、セックスの味を知るオンナが満足しきれはるはずもない。

ゆったりとした満足感を楽しんでいる一方で、猛る逸物が食い込む股間は我慢できないほど疼いている。

火で炙られているのではないかと思うほど熱くなり、お漏らしでもしている気にさせられるほど恥蜜で潤んでいる。

「せ、先生……僕……」

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

ペニスを淫らに震えさせながら、切なそうに言ってくる。

何を言いたいのかはすぐに分かった。

性器同士を合体させるセックスを求めているのだ。

しかし、彼はこの期に及んでも力任せに欲望を叶えようとはしてこなかった。ペニスといい、赤く染まったしどけない顔といい、目の前にいる牝を押し倒したくて堪らないだろうに。

「いいわよ……セックス、させてあげるわ……」

だったら自分が導くしかない。

そつと彼を引き離し、彼に向けてお尻を向けながら、スカートをめくりあげつつ四つん這いになる。

胸の下に手を通し、ショーツに手の平を貼り付かせた。

「ほら、先生のここにあなたの素敵なおペニスを入れていいから……」

男の劣情を煽る真っ赤なショーツのクロッチをずらし、裸の股間を見せつける。彼が息を呑んで言ってきた。

「ヘアを剃ったんですね……オマンコがツルツルになって……ああ、ぐしよ濡れでふつくり膨れて、いやらしく小さく開いて中から赤いお肉がはみ出でて……」

彼も四つん這いになって、オナナの部分を凝視してくる。熱烈な視線が恥丘全体を

熱くさせ、吹き付けられる荒い鼻息が膣の奥を堪らなく疼かせる。

「そ、そうよ……あなたに見られても恥ずかしくないように剃毛して……アソコも、キスですっかり昂っていやらしく膨らんで、はしたないお汁も溢れてしまつて……」挑発するように言う。彼をその気にさせる作戦だが、言っている内に愛液がトプツと噴き出て床に落ち、小さな水たまりを作る。

淫らな台詞を言うだけで、背筋がゾクゾクした。教師で夫のいる女なのに、生徒で夫でもない若い男を誘惑しているのだ。背徳の甘美を感じずにいられない。

「清楚なソックスを着けた太腿ムチムチして、いやらしく左右に開いて股間がよく見えるようになっていて……ああああ、すごい……」

清純なニーソックスを纏う熟れた太腿にも、枝分かれする川みたいに愛液の筋がついている。興奮して浮き出た汗と混ざり合い、光を反射してキラキラ光っていた。

彼は胸とお尻にも言及した。

重力に引かれて、育ちすぎたナスのようにどっしりと垂れる豊胸や、淫靡なショーツの後布からムチムチとはみ出る尻たぶも彼は気に入ってくれたようだ。

そして、それらを熱視される度、素敵だと褒めてもらうごとに身体がカアツと熱くなり、股間からはダラダラと愛液が滴った。

「あああ、いいのよ、私のアソコ……お、オマンコは今だけはあなたのものだから……」

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

…あなたの逞しいオチンポを先生のはしたないオマンコに突っ込んで……っ」
なかなか欲望に正直にならない彼の背中を押すべく、夫にもほとんど聞かせたことのない卑語を口にして、色っぽくお尻を左右に振る。

セーラースカートが軽くそよぎ、ショーツのバックからはみ出る尻たぶがフルフルと震える。

クロッチをずらされた股間はアーモンドめいた形に露出していた。ぐしよ濡れの肉丘と、襖の隙間みたいに開いた陰裂からはみ出す肉ビラは照明の光を浴びて極彩色に輝いており、とめどなく恥汗をこぼしている。

「は、はい……っ、あ、でもちよつと待ってください……今、鞆からコンドームを持ってきましたから」

とうとう、その気になってくれた彼がそう言ったが、

「な、ナマでいいから……先生、こんな時のためにずっとピルを飲んでいたので……だから、そのまま……先生、もう待ちきれないの……!」

(あああ、い、言っちゃった……教師なのに……人妻なのに……!)

ピルを飲んでいたというのは本当で、我慢できないというのも事実だった。

折角、スキンをしてくれるというのなら、そうしてもらった方が避妊成功確率は百パーセントに限りなく近づく。

(で、でも……あのオチンチンをオマンコに欲しい……あれで、思い切りセックスしたい……ッ！)

発情したオンナ教師は彼の人並み外れたペニスを欲しがっていた。

キスで昂り、誘惑で我慢できなくなり、結果、頭の中ではフェラチオした時の記憶が何度も再生されていた。

舌と口内で味わったずっしりとした重さ。焼けた鉄棒みたいな硬さと熱。肉棒全体からくゆる牡臭さ。特に亀頭から放たれるのは頭の芯を痺れさせる。

オンナの楽しみを知る身では、陰部で味わってみたくて仕方ない。

「で、でも……」

「ねえ、大丈夫だから……妊娠の危険はないから、ね？ ほら、ほらあ」

剥き出しの陰部を彼の股間に何度もぶつける。

ぶつけられた逸物は、ズボンの中で更に熱く膨れ上がる。

「あああ、せ、先生……ほ、本当にいいんですね……ナマでセックスしていいんですね……？」

「え、ええ、本当にいいわ……ああ、早くきて……」

「ぼ、僕……童貞で……先生の中に入れた途端に、精液出しちゃうかもしれないですよ……耐えられる自信ないです……そ、それでもいいんですか……？」

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

「いいわ……一回出しても、若いんだから二回も三回もできるでしょ？」
ピタンピタンとお尻とぶつけながら、潤んだ目で見ると。

「せ、先生ッ！」

彼は鼻息荒くズボンと下着を脱いだ。

ガチガチに勃起した逸物が転げ出て、へそ近くまで反り返る。

「そう、それよ、先生、それをオマンコに欲しかったのっ」

頂上からは、噴火した山のマグマみたいに先走り汁が垂れている。亀頭を全面的にコーティングしながら竿も汚しており、ウブな肉棒をぬらぬらと鈍く光らせている。

彼は根本を持って、先端を秘裂にピタリと当てた。

「あっ、熱いわっ………！」

はみ出る小陰唇に押し当てられた亀頭は、燃えているみたいに熱い。口淫をした時以上に硬く、先っぽを押しつけられているだけに、ずっしりとした触感が膣の内部にまで届けられる。ビクビクと力強い脈動は、蜘蛛の巣が張った肉筒を狂おしいほど疼かせた。

先走り汁で汚れた亀頭は、新しく漏れ出た愛液でも汚され、自身の体液と恥汁の匂いを纏う。

「いいわよ、そのまま腰を前に突き出すの」

早く挿入されたいもどかしさを必死に我慢しながら、陰部を見せつけていた手で彼の勃起を逆手に握った。

一息で膣を貫けるように手助けしているのだ。

「は、はいっ、先生、先生のオマンコに僕のオチンチンを挿れさせてもらいます！」
ジュブウウウウウウウ！

「んあああああ！」

愛液をしぶかせ、粘っこい水音を放ちながら人並み外れた童貞ペニスが押し入ってくる。

熱くて硬い穂先は、閉ざされていた熟女膣をこじ開けながら進んでいく。

外側に大きく張り出したカリが、ぐしよ濡れの膣を抉り擦りながら膣内を広げ、拡張された膣肉は亀頭と竿にぴったりと密着する。

亀頭と竿にへばりつく肉ヒダに、牡棒の熱感と硬度と重量感が伸しかかる。燃えるように熱く疼いていた膣肉が焼け落ちそうな位に熱くなり、疼きが甘美な陶酔感に変換されていく。

（ああああ、この子のオチンチンが私の中に……教師なのに……人妻なのに……許されないのに……ッ！）

尻たぶを握られつつ、体重をかけながら腰をゆっくり突き出してくる男子学生。人

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

妻教師は滑り台みたいに背中をしならせ、背筋をビクビク痙攣させる。

禁忌を意識するほど甘美な背徳感が湧き起こり、心身がドロドロに溶けるような快感が身体を舐め、肉棒を受け入れる快美感が増幅した。

「んあああああああつっつ！」

牡棒の穂先が子宮口に接触し、さらにグググと押し入ってきたところで、下腹と尻たぶがパチンツと鳴った。

若い巨根は、人妻教師の子宮口をグイグイと押し上げている。子宮が前方に押しやられ、圧迫感は今まで感じたことのないほどだった。

「先生っ……あああ、先生……はあっ、はああアアアっ！」

子宮口と密着する亀頭が、ドクンドクンと脈動しながら熱と体積を増している。

竿もポンプみたくに力強く律動しており、尻たぶと接触している下腹が苦しそうに痙攣しているのが伝わってきた。

射精の予兆だ。童貞ペニスは挿れただけで爆発しようとしている。

「ああああ、で、出るのね……私の中で射精するのね……！」

若牡の射精前兆を感じ取る人妻教師が歓声を上げた。

（こんなに若い子が、こんなオバサンに……挿入しただけで我慢できなくなるなんて……嬉しい……）

女性としての自信が湧いてくる。夫との性交渉が遠くなっている、女として劣等感を感じていただけに、彼のこの反応はひとしおだった。

喜びが興奮を高め、膣がキュウキュウ締まっていくな。止めどなく分泌される愛液が膣とペニスの粘り具合を強め、若い牡棒をさらに興奮させる。

「出ちゃうっ、先生の中に、精液でちゃう！」

「出して出して、先生の中にいっぱい出してえ！」

ペニスが激しく脈動しながら膨れ上がり、興奮で熱くなる膣が肉棒を締め上げる。挿入状態で達するのは可哀想だと思い、人妻教師は身体を前後に揺すりながら少しでも気持ちよく射精して欲しいと思いつつながら膣を絞った。

じゅちゅ……にゅちゅつつ……じゅにゅうう……。

ゆつくりと、カリ首まで膣を抜き、根本までペニスを呑み込む。

「ああああ、だめ、先生、もうだめですッッ！」

尻たぶを握る手がデタラメに震え、彼の声がいよいよ切迫する。

ペニスはますますビクビク脈打ち、三度目に膣を抜いて小陰唇とカリ首が擦れ合った瞬間、

ドビュンツッ！ ドクウウウ！ ビュビュッ！

「ああっ、あっ、ふあああああ！」

それを意識すると、心臓がキュツと締め付けられ、背筋が妖しい官能に舐めしやぶられる。

「だ、大丈夫よ……先生、こんなこともあるかと、ピルを飲んでいたって言ったでしょ？ ……避妊はしていたから……はああ」

自分から押し倒すような真似をするとは思わなかったが、若い彼とこうなってしまう時の対策は行っていたのだ。

(でも……ピルと言っても完璧ではないから……)

一応、効果が現れていることは確認しているが、万一ということはいつでも付いてくる。避妊の甲斐なく、本当に妊娠することだってあり得るだろう。

ましてや、彼がスキンを着けるのを止めさせたのであればその確率は上がっている。危険を下げる機会は、自分から棒に振ったのだ。

それを思うと、何故かムラムラしてしまう。許されない妊娠の危険がある禁断のセックスを続けたいというドス黒い欲望が胸の中に広まっていく。

「一回だけでは物足りないでしょ？ 先生の中であたのオチンチン、すごくビクビクしてるわ……避妊してるから遠慮しなくていいの……折角のチャンスなんだから、思い切り楽しみなさいね」

そう言うものの、実際は自分に言い聞かせているのかも知れない。漠然と思ってい

ると、彼が口を開いた。

「は、はい……それじゃ、もっと楽しませてもらいます」

顔を見れば、完全にふっきった風でもなかった。目には罪悪感や禁忌を犯すことへの恐れが見え隠れする。

しかし、目の前の女をメスと認識し、オスとして骨の髄までしゃぶり尽くそうとする欲望の気配は大きかった。

「ええ、そうしなさい」

その気になった耳年増の男子は何をするのだろうか、と思うと心臓が大きく跳ねて、期待で膣内が疼いてしまう。

ニュジュ~~~~~ッ。

彼は挿入を深めた。太腿をガツシリ抱え込み、体重をかけながら前方へ摺り足でゆつくり進む。

「ああん……はあうんん……ンンッ！」

衰えない肉棒が、熱と量感と硬感を膣内に擦り付けてくる。

白濁と愛液に塗れた肉壁はこじ開けられていき、牡棒の形の鑄型になる。

「はあうんん！ んあ……はああ………はああ」

「先生、僕のはどうですか？」

「いいわよ……すごく素敵……ああ、子宮口とキスしてるのいいっ……」

教師の威厳がなりを潜め、メスの浅ましさが顔を出す。

子宮口をグイグイ押し込んでくる肉の逞しさに熱っぽい吐息をこぼし、膣壁と粘り合うペニスの表面の雄々しさに、涎のように愛液を吐き出し続ける。

「ふふ、先生のオマンコ、すごく熱くて、キュウキュウ締め付けてきてとても素敵ですよ。それにすごく濡れていて……先生も、自分がどれだけぐしょ濡れなのか見てみてください」

そう言うと、教室内の壁掛け鏡を見るように促した。

「ああ……はああああああ……」

犬が用足しをする時みたいに、四つん這いの体勢でセーラーズスカートごと足を上げられる。

スカートの中に隠れていた股間が露わになった。赤いショーツは愛液と白さを失いつつある精液でぐっしりと濡れそぼっており、純白のニーソックスに包まれるムチムチの太腿まで汚れてしまっている。

当然、性汁は神聖な教室の床にもポタポタ垂れており、握り拳大の水たまりができていた。甘酸っぱい匂いと、栗の花みたいな匂いがぷーんと周囲に漂っている。

「皆が勉強する所でこんなに発情して。そんなに教え子とセックスするのが気持ちい

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!



第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!

ペニスの存在感を思い知らせながら、存分に女の快感を味わわせるやり方だった。快感と引き替えに抵抗心が削がれ、人妻教師の口から禁断の台詞が飛び出した。

「あぁっ、気持ちいいです……生徒とのセックスいいですっ」

自分が目上であるのに、彼の方が年上のように丁寧な言葉で言い放つ。

「何が気持ちいいんですか？」

太腿を抱え、意図的に淫らな水音を大きく鳴らし、鏡に映った抜き差しの様子を見るよう促しながら尋ねる。

「はぁ、あぁ、アソコ……アソコです……はぁんっ」

「アソコじゃないでしょ？ オマンコでしょ？ 言い直してください」

間違えた生徒にやり直しさせる教師みたいに厳しい口調で言ってくる。

子宮口と密着させた亀頭を小刻みにピストンし、子宮を揺さぶりながら。

「ああああ、はぁああ、お、オマンコっ、オマンコ気持ちいいですっ」

「生徒の……学生チンポで女教師オマンコ擦られて気持ちいいんですね？」

「はい、はいっ、学生チンポいいですっ、学生チンポに苛められて、女教師オマンコ気持ちいいですっ、んふぁぁ！」

あられもなく卑語を口走り、倒錯的な状況に身を委ねるのは、言葉通りに気持ちよかったです。

膣に居座るペニスみたいに心臓がドクンドクン鳴り、全身から汗が噴き出てセーラー服の中はじつとりと蒸れている。

鼠径部からニーソックスの間の肌はピンク色にツヤツヤしていて、汗の玉が幾つも浮いていた。

鏡に映る顔はしどけなく、教壇に立っている時はもちろん、夫とセックスしている時でもこんなにしどけなくなったことはない。

「はあ、はあっ、ああ、いいです、先生、最高です……ああ、またいきそうだ……くうっ、先生の……女教師マンコに学生ザーメン出しますよっ、思い切り出していますよね？」

「出して出してえ、女教師マンコをあなたの学生ザーメンでたっぷり満たして……ああ、私もいきそう、んああ、もっと強く、ズンズンしてっ、一緒に、一緒に！」

「ああ、いいっ、いきますよ、一緒に……中出しされて、イッてくださいっ！」
抱えていた太腿を下ろし、後ろから猛然と腰を振る。

女教師は床に頬をべったりつけ、自分から尻を高く掲げて、彼がピストンしやすい体勢になる。

「んっ……ああ……はあっ、あああ……お、奥につ、オマンコの奥に響くっ……んああ、オチンポビクビクしてるっ！」

第三話 頼み込んでセーラー服姿でH!



子宮口を小刻みに突きながら子宮をグラグラ揺さぶるペニスは、燃えているみたいに熱くなり、鉄のように硬くなっている。

快感でちよつとずつ収縮している膣壁を、重量感たつぷりの竿は内側からグイグイ押し返していた。亀頭と同じくドクドクと脈動し、膣の内部を震えさせる。

「んっ、ハアツ、アアア、出すよ先生、先生の中に、女教師オマンコにザーメン出しますっ！ うああああッッッ！」

彼は思いきり腰を突き入れた。下腹と尻たぶがぶつかって、パチンツ！ と勢いよく鳴った刹那、幾度も突かれた子宮口に亀頭がめっちゃよりと嵌まり込み、

ドビュ~~~~~！ ドグツ、ドグンドグンツツ！

「ああああああアアアア——！」

熱い濁液が子宮口で爆発した。

二発目だというのに、熱さも粘度も甚だしい。ドクドクと吐き出される度、ザーメンは火傷しそうな熱感と吸着感を振りまきながら膣内の壁の底に染み込んでいく。一番に当たる子宮はマグマが当たっているように熱く、子宮までカアツと熱くなっている。

「女教師オマンコイクツ、イクツ、ああ、イクツツツ！」

ビクンツ、ビクビクビクツ、ビクンビクンツ！



膣内に牡学生の精液を叩きつけられながら、直前に彼が放った卑語を鸚鵡返しに口走り、女教師も絶頂する。

背中を反らせ、セーラー服の胴体と純白ニーソックスの足をビクビク痙攣させながら、絶頂の恥声を撒き散らす。

「んんっ、先生、もつと、もつとオマンコで僕の精液飲んでくださいっ！」
尻たぶに当たる下腹が突っ張り、彼が躍起になって精液を出している。

「ああああ、出てるっ、まだビクビクッてしながら、出してるうう！んああっ」
学生が精液を注ぎ込むと、女教師が嬉しそうに牝声で叫ぶ。

（あああ……いい……こんな久しぶり……年下の……学生なのに……あ
の人でないのに……）

オンナを味わわされてしまっている。

やがて、快感の脱力に身を任せてドサリと床に倒れ込む女教師。

禁断の蜜時で得た心身の蕩けるようなドス黒い快樂にいつまでも浸り、なかなか普段の自分に戻ろうとはしなかった。

第四話 頼み込んでスク水姿で！

電車で一時間ほどの所にあるビーチへやってきた。

半日もいればすっかり日焼けしてしまうほど燦々と太陽が照りつける中、水着姿の人妻教師とその教え子が腕を組んで歩いている。

約束は既に果たしていたのだが、対価が足りないと迫られてしまい、夏子は流されるまま、求めに応じてしまったのだった。

(ああ……また……教え子で、あの人でない男の人と……今度はデートみたい……) 自分の立場を思うと胸が締め付けられるが、それは罪悪感とも不倫を働くことへのふしだらな期待ともつかなかった。

欲求不満だっただけに、それを満たしてくれた牡への牝としての好意は強くなっているのだ。

熱い砂浜は人でごった返しており、喧噪が絶える時もない。そんな中、彼がそっと頬を寄せてきた。

「夏子さんのいやらしいスク水姿を皆見えていますよ」

正体に気づかれないための予防策の一つとして、先生ではなく名前で呼ばせている。

その決め毎に従い、名前呼びで羞恥心を煽るように言ってくる。

実際、遊びに来た若い男や、恋人連れ青年、家族サービス中らしき中年もポカんと口を開けてこちらを凝視しており、中には股間を膨らませている者もいる。

（ああああ……こ、こんな姿をしてるのに……皆、ギラギラした目で私を見てる……ッ）

胸中で歓喜で沸き立った。

男たちの牝を見る目が、自分がオンナだと強く自覚させる。

身体が官能に包まれて、太陽の光や熱砂の熱、人々の熱気で熱かった身体がますます熱くなっていく。股間がキュンツと疼くのが気持ちよく、自然と、この場で大勢に見られながら教え子とセックスする自分を妄想して股間をさらに潤わせてしまう。

夏子は紺のスクール水着を着ていた。

サイズが一回り小さいので、豊満な肉体がはちきれんばかりにはみ出している。

しなやかながら程よく肉の付いた長い腕。脂の乗ったスラリとした足。

胸元の熟した肉果実は内側からギュウギュウ布地を押ししており、興奮して勃ってしまった乳首もクツキリと浮き上がっている。

前布は鼠径部の内側に食い込んできており、布の端と腿の付け根の間の肉がこんもりと盛り上がっていた。

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

お尻も尻たぶの谷間に布が落ち込んでいて、まるでハイレグショーツを着けているよう。はみ出ながら後ろに向かって突き出ている。

ウエストは幾分ぶかぶかしているが、それが却って細腰の存在を際立たせる。変装のために普段ひつつめにしてある髪を解いてもいた。豊かで枝毛一本ないロングヘアは大人の色気を漂わせていて、熟女がスクール水着を着ている倒錯官能に拍車をかけている。

変装目的でかけている、俳優が休日につけるようなアダルトなサングラスも同じように倒錯性を強めていた。

「ねえ、本当に私だって分からないわよね？　こんな格好をしているのを知り合いに見られたら、もう教師なんてしていられないわ」

「大丈夫。学校の夏子さんとはまるで別人ですから分かりませんよ……勿論、今の夏子さんだけでなく学校の夏子さんも両方綺麗ですからね」

重要なことだと言わんばかりに付け足してくる。

「だといいのだけれど……」

見られて興奮してはいるが、やはり正体が露見した時のリスクは頭から離れない。もつとも、それも淫らな興奮を高めている一因でもあるのだが。

(やっぱりドキドキしちゃう……この子に名前でも呼ばれるのも興奮しちゃうわ……)

似たようなサングラスをかけている男子に親しげに名前を呼ばれると、胸に甘い切なさが広がる。

（まるで恋人同士みたい……名前を呼ばただけでこんな風に気持ちよくなっちゃうなんて……）

そんな喜びを感じながら、ふたりはビーチを練り歩いた。

二の腕や腰の側面を合わせていると伝わってくる肌の肉感と体温も軽い陶酔を与えてくれる。

聞こえてくる息づかい、時々、優しく辱めるように紡がれる台詞も心躍らせる。

（あっ……この子も興奮しているのね……）

ふと見ると、彼も股間を大きくしていた。自分だけでなく彼も興奮していると思うと一体感を感じ、腕を組んで歩く喜びがますます大きくなる。

夏子にとっては、視姦されながら歩く行為はセックスの前戯に等しく、人気のない場所に着いた頃には、すっかり発情してしまっていた。

「こ、ここでするのね……」

声は官能的に上擦っていた。喋った拍子に漏れた吐息も熱く重たい。

全身は興奮の汗でぐっしより濡れており、焼け付くような強い日差しを反射してキラキラと輝いている。

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

スクール水着の股布は股間に食い込み、愛液で貼り付き、淫裂にキツく伸しかかっ
てきていた。

「これどうぞ」

彼は返答代わりに黒い布を渡してきた。

目隠しだ。

事前に打ち合わせをしていた時は変装のためと言われ、必要と思ったのでつけるこ
とに同意した。

心の片隅で、サングラスのままでも事足りるのにも思ったが、こちらの方がSM的
な興奮を誘う。黒い布で目隠しされた自分が健康的なビーチでこっそりエッチをする様
子は、妄想するだけで膣が熱くなるので承諾した面もある。

ドキドキと鼓動を高鳴らせながら、目をつむってギュッと目隠しをする。

解けないように結び終わると太陽の光は感じるが、物はすっかり見えなくなった。

これで、自分は彼に依存することになる。

彼の心づもり一つで、自分はどんな酷い目にも合うのだ。正体を暴露されて、男た
ちの慰み者として差し出されたとしても、彼が身体を傷つけるような行為をしようと
していても分かりはしない。

(この子はそんなことをしないけれど……)

信頼の置ける者でなければ、こんな無防備な姿を見せはしない。

男のサガだろうが嗜虐的な面もあるものの、基本的にはこちらを思いやり、傷つけるようなセックスはしないと、彼と過ごした過去から分かっているから、自分の身体を委ねている。

肉体関係を結んだ経緯は異常ではあるものの、その点は信じているのだ。

「はああ……ドキドキするわ……戸部君、どこにいるの？」

これから行う情事への期待で声を桃色づかせながら小さく尋ねると、静かに手を取られた。

むにっ……。

股間に触れさせられた。肉棒は海水パンツの中で硬く熱く膨張しており、すぐにも女性器へ突き立てて子種を吐き出す準備はできている。

「もつと触って、夏子さん。どんな感じ？」

「とても熱いわ。硬くって、重たそうで……触っているだけで、オマンコ寂しくなっちゃう」

変装しているという意識が、普段の自分が自制している淫らな心を露出させていた。自分から彼の股間を撫でて、さらに勃起させようと刺激し、淫語を喋る。

クチュ……ニチュ、ジュプ、ジュプ……。

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

「あんっ、あああ……はああああ……」

海水パンツの中で逸物を押し倒し、こちらに向けられた裏筋を上へ下へと撫でていと、彼はこちらの股布をずらして指を入れてきた。

人差し指と中指だろう。指の股がつかえるまで入れてきたかと思うと、ゆるゆると抜き差しを始める。

しなやかな指も火照っていて、異物が挿入されている実感を与えてくる。

抜き差しされる指は次第にうねうねとそよぎ始め、溝の深い肉ヒダが引っ搔かれるようになる。

「ああン……痺れちゃう……」

刺激される膣肉がじいーんと甘く痺れ、発情していた身体を淫らな官能で包み込む。

「何が痺れるんですか？」

指を動かしながら、日常会話をする時よりも大きめの声で尋ねてくる。

「んふう……ああ、オマンコ……オマンコの肉ビラが、あなたの指で擦れて……んはああ、小陰唇もめくられて……」

視界が閉ざされている分、敏感になっている。頭の中には自分の秘裂内部のイメージが浮かんでいた。若い男の二本の指で膣を搔き回され、愛液をだらだら垂らしながら年甲斐もなく甘えた声を出しているスクール水着姿のオバサン教師の姿だ。

想像するだけで身体が燃え上がるように熱くなり、興奮し、指の動きに合わせて腰がクネクネとうねってしまう。

「見られてますよ先生……十メートルくらい離れた所の陰から三、四人か覗いてます……あ、あっちにも覗いてる男がいる……二十代や四十代、色々な年代の人が先生を見て勃起してますよ」

カアアアアアツツツ！

言われた途端、猛烈に身体が熱くなった。

「はああ……いやあ………恥ずかしい……」

「ふふ、恥ずかしいと言いながら、興奮してるじゃないですか……指がキュウツて締め付けられましたよ……学校では真面目な先生なのに、スク水なんて着て、変装なんて卑怯な真似をしてまで、学生チンポの相手をしようとしている上に、知らない男たちに見られてオマンコを締め付けるなんて………いやらしいですね」

見られて喜んでしまうアブノーマルな性格を指摘することで羞恥心を煽り、『先生』と呼ぶことで、いかに社会的な地位に反していることをしているのかを、自覚させてくる。

段々と嗜虐性が強くなり、決め事で避けようとしたリスクを種に責め立ててくる。普通の女ならば性的な興奮が冷めてしてしまうだろうが、自分は違った。

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

もっと辱められたい、昂る身体を。ペニスで早く慰めて欲しいという浅ましい欲求が膨らむのだ。

「僕の指が夏子さんの恥ずかしい汁でべちゃべちゃです……もうこんなにして。ほら、自分でも確かめてみてください」

そう言って、指を唇につけてきた。餌にパクつく鯉のように指を口に含み、舌で味を確かめる。

「どうですか？ 自分の味は」

「んんむっ……ぴちや、ぺろぺろ……ふはあ……甘くて……酸っぱいです……」

「お汁がたくさん絡みついているでしょう？ 夏子さんのなんだから、全部舐め取ってくださいね」

「あむっ、は、はいっ、んむ、ぴちや、れる、れるっ」

(ああ……感じちゃう……)

ペニスをしゃぶるように指を舐めていると、頭が痺れて膣の中が物欲しそうに切なくなってくる。

自分の方が年上なのに、年下の男子にはしたない命令をされる倒錯が気持ちよく、自分の体液を舐めさせられる異常もゾクゾクと背筋を震わせる。

「舌を突き出して舐めてください……犬みたいにししゃぶる様子を皆に見せて……」

彼はだんだん指を上げていき、舌を伸ばしてようやく届く場所で止まった。夏子はパン食い競争でパンに飛びつくみたいに口を空に向け、唾液でぬめる舌を突き出す。はあはあと犬が呼吸するみたいに息を吐き出し、唇の端から唾液をこぼし、そして艶やかな髪をふわりふわりとなびかせながら、夢中になって指を舐める。

「もういいですよ。すっかり綺麗になりました……代わりに夏子さんの唾液でべとべとになりましたけど。ちゅぱっ、ちゅるる」

鼻先に彼の気配を感じたと思った矢先、間近から指をしゃぶる音が聞こえてきた。ちゅぱちゅぱちゅうちゅうちゅと、まるで子供が手に付いたクリームを舐めるみたいに舐めている。

「ふふ、夏子さんのツバ、すごく美味しいです。甘くて、トロツとして……キスした時と同じ味ですね」

カアアアッ！

自分の唾液を舐められていると言われると、猛烈な羞恥心に襲われる。

彼は明らかに周囲に聞こえるように言っている。自分の唾液の味を、デバガメたちに喧伝しているのだ。

(ああ……興奮しちゃう……)

羞恥心は熱い官能を伴っている。自分の扇情的な姿に当てられて付いてきたのであ

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

ろう見知らぬ男たちに自分の唾液の味を知らされていと思うと、気持ちよく胸がドキドキしてくるのだった。

「おやおや。オマンコからまたはしたない汁を出して……いやらしい……そうだ、今度はおっぱいを弄らせてくださいね」

言うや否や彼は背後に回ってきた。背中にぴったりくっついて、薄い胸板を密着させてくる。

胸元だけでなく、お尻には腰を、太腿には太腿を押しつけてそれぞれの場所に体温の交換をさせている。

彼の身体も大分熱くなっていた。それに、

ずん、むにゅ……。

(ああ……すごい………はああ……)

尻たぶをテントの屋根で突かれた。海水パンツごしでも熱く硬く勃起しているのが伝わってくる。もう、先走り汁を出しているかもしれない。

自分を辱め、興奮させている一方で彼も興奮しているのは、一緒に発情しているという一体感が感じられて何だかとても嬉しかった。そんな嬉しさは安心感を呼び、される行為への興奮をますます大きくする。

ムニユリッ、モミモミ、ムニユムニユッ、モミッ。

「あんっ、はあああっ……んふっう……ああ……」

彼は腋の下から手を通して、十指を広げて胸を揉みしだいてきた。

パツパツのスクール水着を押し上げている豊胸に若い男の指が食い込み、指と乳肌
の間に深い谷間を作っている。

指の食い込みが乳悦を呼び、思わず身体がくねってしまふ。

「いやらしく身体を振って……胸、気持ちいいですか？」

「気持ちいいわ……はあああ、ああ、胸、いい……」

甘ったるい媚声と溜め息を吐き出しながら答える。

「皆見てますよ……AVでも見るような目で……ペニスを勃起させて……それでも
気持ちいいんですか？」

商売でしているわけでもないのだから、常識で考えればこんな状況で興奮する女は
いない。

「気持ちいいっ……ああ、もっと胸を揉んで……っ」

けれども、今の自分は違う。

若い男に胸を揉みしだかれる官能は、身体の芯を蕩けさせるみたいに甘美で、見ら
れていることはそれに拍車をかける発情薬だった。

乳房だけでなく身体もどんどん熱くなり、夥しい量の愛液を垂らす股間には股布が

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

貼り付きながら深く深く食い込んでいく。その刺激がさらに興奮を呼び、官能の循環機構ができあがっていた。

ムニユリツ、ユサユサ、ムニユツ、ミュニユ、ブルンブルン。

鷲掴みにして胸をひしゃげさせ、かと思えば手の平で下乳を支えながら大きく揺さぶり、あるいは胸元で乳房をくびりながら大きく弾ませる。

「やあ、んんっ……ああ、胸に響くう……はああああ」

千変万化の責めは、胸が痺れる快感を、乳房の芯までじいんと痺れる甘い振動を、胸が締め付けられると同時に豊胸がもげそうな強烈な快美を味わわせてくる。

「夏子さんの乳首、すごくコリコリですよ」

乳悦を受け続ける乳房は、ただでさえ窮屈な布地の中でパンパンに膨れてしまい、乳首などはスクール水着を突き破らん勢いで勃起している。

乳房の先端の乳頭があるべき位置では、スクール水着を破りそうな勢いで膨れあがった肉柱がそそり立っていた。

彼はそれをオーケーサインにした指で摘み、クニクニと揉み潰す。

「はあああっ、んんっ……んふうっ、んあああああっ」

乳首に強い快感電流が走り、思わず身体をよじらせてしまう。興奮で赤さと厚みの増した唇からはひっきりなしにはしたない嬌声上がり、身体のくねりに合わせて豊

かな髪がふわりふわりと踊る。

「気持ちいいですか、乳首？」

「気持ちいいっ、乳首気持ちいいのお……っ」

顎を肩に乗せた彼の問いに、甘ったるい声で答える人妻教師。

「硬くなった乳首を揉まれてよがっている夏子さんをみんな見てますよ。それでも気持ちいいんですか？」

「あああ、気持ちいいっ……はふうん……見られてても気持ちいいの……んあああ」
見られていることを意識しても乳頭快感は霧散しない。それどころか、視姦されていると思うほど背筋がゾクゾクしてくる。

「いやらしいです……なら、皆に言ってください。乳首を責められて気持ちいいって」
「あああ……見てください……乳首を責められて、んはああ……それを見られて気持ちよくしている私を見てえ……」

促されるままに視姦を懇願すると、悦楽が濃密になる。

股間から漏れる愛液はいよいよ量を増し、汁で濡れる太腿はピクピクと粘い痙攣を繰り返している。

（あああ……私、なんて恥知らずなことをしているの……）

若い男に乳首を弄られては恥声を上げ、誰とも知らない覗き魔たちに痴態を見て欲

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

しいと哀願している。

(でも……でもっ、気持ちいい……ああ、すごいっ……)

夫とのセックスどころか、彼との情事でも味わったことのない爽快感が全身を駆け巡っている。

人妻として、教師としてのモラルから解放され、ただ一匹の牝として心を許した牝に責められる快感。自分に欲情する他の男たちを媚びるように扇情し、彼らを昂らせる牝としての優越感。それらが合わさり、普段以上の快楽を享受できているのだろう。

「本当にいやらしいですよ夏子さん……皆に見てといいながら、ココをこんなに濡らして」

じゅぷっ、にちゃにちゃ、こしゅこしゅ、にちゅ。

「ああん、オマンコっ、オマンコ気持ちいいっ」

片手で乳首を弄びながら、別の手の指をぐしょ濡れの陰部に挿入し、愛液をしぶかせながら抜き差しを始める。

入っているのは二本指。また人差し指と中指だろう。彼の勃起ペニスよりも一回り細い肉の太さが、膣を刺激していた。

出入りしながら指の腹で肉壁を引っ掻き、かと思えば深く挿入した後に二本の指をそれぞれでたためにそよがせる。

「はああっ、ああっ、あんっ、ああンンッ、くああん」

「オマンコ、僕の指をキュウキュウ締め付けてきますよ。まるで、指をチンポと
思っているみたい……欲しいですか？ 僕のチンポ」

そう言うと、お尻に股間を押しつけてくる。海水パンツごしにも猛烈に熱く硬くな
っているのが伝わってくる。

その肉棒と交わる旨みを知るだけに、指で愛撫されている膣内は切なくキュンキュ
ン疼き始め、涎を垂らすように愛液を溢れさせる。

「はあん、欲しい……欲しいのお、あなたのオチンポ、私に頂戴……ああああ」

スクール水着からはみ出す尻たぶの谷間に、海水パンツをテントにしている牡肉柱
を挟み込み、尻を上下に振る。

「んっ、んっ、あなたも欲しいでしょ？ こんなに硬くしているんですもの、私のオ
マンコに入れて、セックスしたいでしょ？」

刺激されるペニスは、布の向こう側でひっきりなしにビクビクしている。冷静に喋
っている彼も、本当は我慢できなくなっているはずなのだ。

「こんなにオチンポ震わせて……ああ、また硬い……熱いっ……欲しいっ……」

「夏子さんは、僕のチンポ好きですか？」

「うんうん、好きっ、大好きッ」

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

「どうして？」

焦らすように膣肉を引っ搔かれながら尋ねられ、欲情に心を委ねている夏子は熱に浮かされたように吐露する。

「だって、すごく熱くて、硬くて、重くて、大きいんですもの……はああ……あなた
の勃起オチンポでセックスすると、すごく気持ちよくなれるし……イけるから……あ
あ……精液もたっぷり出て……んああ、中を満たしてくれるのもいいからあ」

(ああ……言ってるだけで思い出しちゃう……)

口にした言葉はどれも本音で世辞はない。台詞はセーラー服姿での情事の記憶と、
快楽を思い出させる。

膣壁の一枚一枚をめくり上げる高いカリ。子宮口に届き子宮を揺さぶる亀頭の穂先。
肉ヒダに圧倒的な熱感と重量感と硬度を伝えてくる竿の逞しさ。

お尻で扱く逸物の感覚に酔いながら、指でなくこの立派な勃起ペニスで苛めて欲し
いと切望しながら尻の谷間で扱き立てる。

「夏子さんにそこまで言われるなんて幸せです」

そう言うと、彼は海水パンツを脱ぎ捨てて仰向けに寝そべり、自分の股間の上に腰
を下ろさせた。

「あ……え……水着を脱いだの……？」

鼠径部から太腿の裏側にかけて伝わってくる肌の熱と肉感に、状況を理解する。

すねに砂のざらざらした感触がし、同時に熱さも染み込んでくる。太陽に照らされ続けていただけに砂は熱かったが、彼の肌に触れていると気にならない。

それに何より、股布の食い込んだ淫裂に感じる肉棒の感触が心を奪う。

「さて、夏子さんのオマンコの下には何がありますか？」
太腿を掴みながら質問してくる。

「オチンポっ、あなたの生のチンポっ！」

待望の物が直にオナナの部分に触れている嬉しさに声を弾ませる。

「僕の生チンポはこういう具合ですか？」

緩慢に腰を突き上げて、裏筋と密着している陰裂を刺激しながら彼は言う。

「あんツ、はぁア、あ、熱くって、硬くって、すごくいいっ……はぁああ、オマンコに当たるっ……！」

「夏子さんのオマンコも、柔らかくて、熱くて……恥ずかしい汁がどんどん溢れて……とつても素敵です」

突き上げを受け、触れ合っていた太股が離れては、パチンツとまた触れ合う衝撃音が木霊する。

粘っこい愛液が双方の太腿を濡らしているので、衝突音はピチャピチャという水音が

第四話 頼み込んでスク水姿でH！



も孕んで淫猥さを際立たせている。

「はああ、いいっ、もつと、もつと硬くなって……」

大陰唇で挟み込んだ裏筋をできるだけ陰裂に迎え入れながら、腰を前後にスライドさせる。

「そうっ、その調子です。そうやって、僕のチンポをもつともつと興奮させてください。最高に勃起した状態で、夏子さんを可愛がってあげますから」

まるでお漏らししたように愛液を垂れ流していたので、ペニスはすぐに濡れそぼつ。ニチュツ、ジュチュチュ、シュツ、ニチャツ。

「あんっ、ふうん、ああ、オマンコに挟まれて……ドクドク脈打って……はふうっ、んっ、んっ、もつと大きくなって、気持ちよくなってえ」

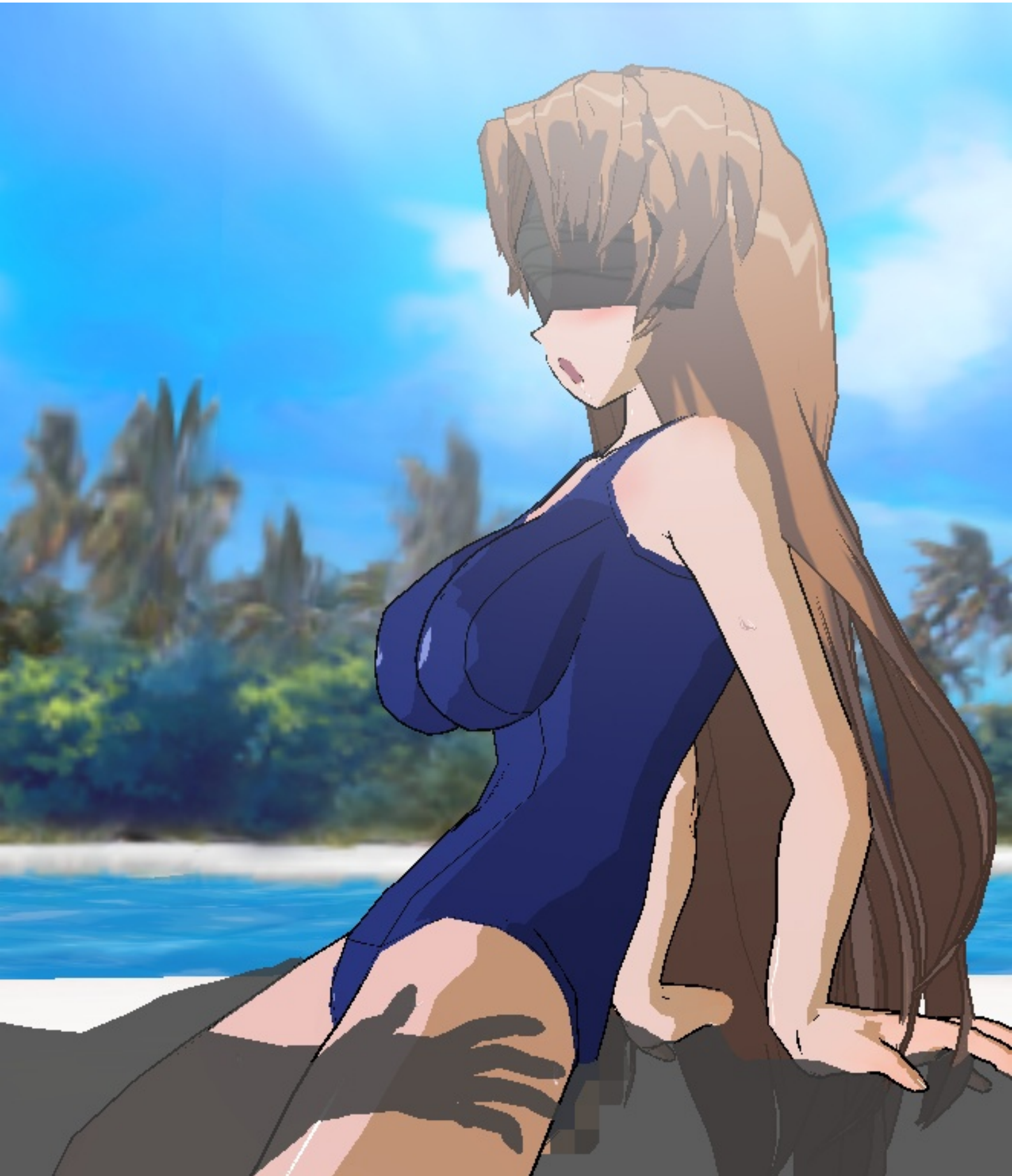
太腿を掴みながら息を合わせて引っ張ってくれる彼の助けを利用しながら、自分は後ろ手でバランスを取り、腰を卑猥にクイクイ前後させ続けた。性器同士の接地面から甲高く粘い水音が奏でられ、青空の下に響き渡る。

「覗いている人たちにも言うてください、オマンコ気持ちいいのでしょ？」

「あんっ、気持ちいいのお、熱くて硬いオチンポ、オマンコと擦れて、私のいやらしい汗が絡みついて、気持ちいいです、あはあん」

裏筋と擦れ合わせるほど、股布は陰裂に食い込む。興奮で膨れた陰核も刺激され、

第四話 頼み込んでスク水姿でH！



甘く強烈な快感電流が陰部で吹き荒れる。

「ヒクヒクするオマンコの様子が裏筋に伝わってきます…いやらしい女性だ」

「ああん、夏子はいやらしいです…オチンポ好きの淫らなオンナですっ」

周囲に聞かせるつもりで官能的な抑揚をつけて言い放つ。自分を辱める言葉を言うと、身体の芯が蕩けるような感覚に襲われ、もつと破廉恥な言葉を周囲に聞かせたいというドス黒い欲求が湧いてくる。

「若いチンポを、いやらしいオマンコに入れて欲しいですか？　これで愛液をどんどん漏らしているオマンコを掻き回して欲しいですか？」

「あんっ、欲しいっ、掻き回してえ、私のオマンコを、あなたの、若いチンポで擦ってえっ」

陰裂で裏筋を抱きしめながら腰をバウンドさせ、あるいは下腹にべったり押しつけながら前後にスライドさせて牡欲を煽る。

淫裂と密着するペニス是一段と膨れ上がり、焼け付きそうなくらいに熱い熱感を放出している。

それをまともに受ける陰部も淫靡に赤熱し、膣の中が疼きで一杯になっていた。

（ああっ、オチンポ…オチンポ入れて欲しいっ、ああっ、入れたいっ、入れちゃうッッ！）

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

ニチャアアア……。

我慢できなく、とうとう自分から腰を上げてしまった。

擦り合わせていた互いの股間と太腿が、離れた後も何本もの愛液の糸で繋がり、淫らな水音を起こす。

「はあっ、はあああ、ああ、オチンポ、いただきますつつっ！」
じゅぶつつっ……!

ガニ股の体勢で足を踏ん張りながら、手探りで探し当てたペニスの竿を握る。股布を亀頭で横にずらし、そのままぐしよ濡れの淫裂の中に滑らせた。

「んはあああああッッッ！」

腰をゆっくり降ろしていくと、すっかり露出していた槍の穂先みたいな亀頭が、ぴったり閉じていた膣肉を押し広げながら入ってくる。

燃えるような熱感と圧倒的な量感は、股間で刺激していた時以上だった。啞え込んでいるだけで、鼻先でバチバチと火花が散る快感が湧き起こる。

逞しいカリ首は肉ヒダの皺を伸ばしながら奥へと進み、やがて子宮口と接触し、子宮ごと押し上げた。

「くうつつう……! んんつつ、ああ、はあああっ」

(堪んないっ、この感触……ああ、病みつきになっちゃう)

逞しい牡肉塊に膣内を占拠される牝の喜びに、人妻教師は我を忘れて浸る。ぼつてりと膨らんだ牡丹色の唇からは熱っぽくて重たい吐息がはあはあと吐き出され、頬はすっかり紅潮している。

汗の粒が浮き出た額やこめかみには髪が何本か貼り付いていた。

「夏子さんの中、いつ入っても気持ちいいですよ……蕩けるように熱くって、チンポにぴったり絡みついてきて……おまけに愛液でぐしよぐしよですから……気持ちいいです」

膣の中のペニスをドクンドクンと脈動させながら、満足そうに言ってくる。

じゅぷぷぷ……にじゅっ、ジュプツ、ジュプツ！

「んはああ、オマンコ、いいっ、気持ちいいっ……ああ、腰が動いちやうっ」

自分の両膝に手を付いてバランスを取りながら、お尻を上下に弾ませる。

スマタと挿入で愛液は尻たぶにも広がっていた。恥汁で広範囲をコーティングされた尻肌は彼の太腿に当たる刹那や、上に持ち上げられる度に上下にブルブル波打っている。

「あんっ、あああ、ンンツツ、奥に響くうっツ」

ただ挿入していた時も狂おしいほど甘い圧迫感を受けていた最奥は、尻たぶを打ちつけると猛烈に突き上げられ、子宮までもが揺さぶられる。

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

快感のせいで口が半開きになり、口の端から唾液の筋が落ちる。瞳に宿る力強さはぼやけていき、目尻からは法悦の涙が溢れていた。

「うああ……あつく、チンポ、気持ちいい……溶けちやいそうだ……ああ、締まってきた……っ」

彼が気持ちよさそうに呻いている。嗜虐的な色が成りを潜め、童顔に相応しい可愛い嬌声を上げていた。

「あはあんっ、もつと、もつと気持ちよくなりましたよう、ううんっ、ふ、ふたりで、一緒に、ああアン！」

激しく波打つ尻たぶに負けない勢いで、張りつめた乳房がブルンブルン上下に弾み、勃起乳首がスクール水着色の縦線を中空に描く。

身体の表面に浮いた汗が飛び散り、仄甘い体臭も一緒に飛散して、ふたりの周りが牝の匂いに包まれる。

「はあ、クンクン、この匂い、スンスンスン、夏子さんのいい匂い……ッ」
逆レイプされながら、相手の匂いを必死に嗅いでうっとりしている。

(ああああ、匂いを嗅いでる、この子、私の臭いを嗅いで興奮してるッ)

荒い鼻息に合わせ、膣内のペニスが肉ヒダ壁を力強く押し返しながら膨張を続けている。

自分の体臭を嗅いで興奮しているという実感は、発情した女体もいよいよ昂らせ、膣の締め付けを強くする。

「ああ、いやらしい……いやらしくて素敵なおっぱいですね」と、下乳を握られた。

「あんっ、あふっ、んあああ、おっぱい、だめえ」

彼はそのまま優しく揉んでくる。パンパンの乳房にやんわりと指が食い込み、軽い乳悦が走る。

鼻にかかった声でダメと言いつつ、人妻教師は腰を振り続けた。

胸をじっくり揉まれ易いよう、ペニスを根本まで咥え込んで腰を下ろし、その状態でも思い切り快感を得るために尻たぶで円を描く。

ぐりぐりと子宮口が擦られ、カリ首で肉ヒダを刺激される。尻を右に振れば左側の、左に振れば右側の膣にかかる圧力が強くなり、腰を振る度に違う快感を味わえる。

「はああっ、もつと、もつと強く揉んでえ、ああはあ、あなたとのセックスを見ている人たちが、もつとオチンポをカタくできるように、はああ、私のおっぱいのよさが少しでも伝わるように、思い切り揉みしだいてえっ」

淫猥に腰を振りながら、彼に哀願する。

「はい、思い切り揉んで、見せつけてあげます！」

第四話 頼み込んでスク水姿でH!



グニツ、モミユモミユツ、ブルンブルン、ブルブルツ、モミモミモミモミ！
「んあああああツツ！ お、おっぱい、いいっ、私のいやらしいおっぱい、見てえっ！」

遠慮がちだった揉み込みは激しさを増し、指が容赦なく乳肌に食い込む。上から下、下から上へ捏ねられ、あるいは、根本からくびられた状態で力強く上下に揺らされ、下乳に手の平を密着させると下から乳房を突き上げてくる。

強く圧迫され、根本から揺さぶられ、振幅させられ、乳悦は刻一刻と変化して落ちて着かない。

みだらに胸を弄ばれる様子を見られていると思うと、ただでさえ熱い身体が視姦される快感を伴う羞恥熱で燃え上がり、意識が心地よく白んでいく。

（くうんっ、気持ちいいっ、ああああ、気持ちいい！）

肌に突き刺さる太陽の光、セックスの音とは対極にある爽やかな波の音。接地している足の裏に感じる砂の熱。

自分がビーチでふしだらな行為に夢中になっている事実が、背徳的な悦楽を加速させる。

グチュウツツ、ジュパンツ、ジュブツン、ジュプツ、ジュブツ！

「あんっ、あんっ、ああっ、あっ、アア、アア、見てえ、砂浜で騎乗位セックスして

る私を見てエッ！」

豊かな髪をうねらせて、尻たぶを前後動させる。

何度も膣内を出入りしたペニスはすっかり愛液に塗れており、太陽の光を反射して極彩色の輝きを放っていた。

竿は限界まで張りつめており、表面に浮く血管が雄々しい脈動を繰り返している。

「くっ、夏子さん、そろそろ出ます……ああ、このまま、中出しいいですかっ？」

亀頭をしきりにビクつかせながら、年下の若牡が言ってくる。

彼も迎え腰を使い始め、息を合わせた騎乗位ピストンの快感が大きくなっていく。

肉体的な快楽だけでなく、心を開いた牡との一体感という精神的な満足も大きくなり、性交の喜びを高めている。

尻たぶが持ち上がる度に愛液の滴が飛散して、ふたりの股間をべったりと汚す。

「はああ、出して、中に、出してっ、思い切り、精液を出して、妊娠してもいいから、あなたの精液で満たして欲しいのツツ」

膣外射精してもらうつもりは毛頭ない。

発情しきって茹だった頭の中では、膣内射精された時の光景が何度もリピート再生されている。

最高潮に赤熱したペニスから、密着した子宮口にドブドブと熱くて濃いザーメンが

放出される時の快感は、思い出ただけで膣を締め付けた。

(あああ、あの人の精液じゃないのに、欲しいって、思っちゃおう)

許されない膣内射精だと意識するほど、不実を働く背徳快感が濃密になって全身を舐め上げる。

「出ますよ夏子さんの中につ、ああ、僕の精液……せ、精子を出します！」

腰を落として股間同士がぶつかり合い、子宮口と亀頭が密着した刹那、ぷっくり膨れていた牡肉塊がビクビク震え、その振動に応えるみたいに腰でのの字を書いて最後の刺激を与えた直後、

ドビュ~~~~ツッ！ ドビュツッ！ ドグンドグン！

精液が弾け、子宮口にじわっと熱粘液の感触が広がり、その刺激で夏子も達する。

「ンンツツツッ！ アアアアア、オマンコイクツ、ああああ、イクウウウウツツツッ！」

耐えるようにしかめた紅潮顔で青空を仰ぎながら、自分の膝をギュツと握り締めつつ、背筋をピンと伸ばす。

ビクビク震える結合部からは精液が幅を利かせた牡牝の性汁が染み出してふたりの股間を平等に汚す。

「ああんンンツ……はあつ、はああああ、精液出てるっつっ……！」

第四話 頼み込んでスク水姿でH!

外に漏れるほど多量の汁は、膣壁の皺の底まで染み渡り、その猛々しい熱感と粘度を刻みつけている。

エクスタシーの波動が落ち着いたと思っても、精液の感触を感じさせられると、また絶頂快感を味わわれる。

人妻教師は年下の若牡にまたがったまま、夫以外の男に膣内射精される快感を受け止める。

肩、背筋、腰、ガニ股の太腿、はみ出る尻たぶがそれぞれ粘っこく痙攣する。ぐっしよりと発汗して焔めく全身が、爽やかな空の下で淫靡にビクビクし続ける。

艶やかで長い髪も、淫らな振動を受けて小刻みに波打っていた。

「んはあっ、はああ、んんっ……ああああ、中出しされるの気持ちいい……ああ……見られているのに……」

絶頂の時間も精液の噴出もひと段落ついた時、満ち足りた声で眩き、満足そうな吐息をこぼす。

許されない膣内射精だと思っただけ、若い男との野外セックスで達してしまっただけ痴女同然であると意識するほど、乱倫を犯す背悦が、奔放にふしだらに振る舞う愉悦が、伸しかかる膣内射精絶頂快感の余韻を強め、人妻教師の全身を焦がす。

ドサッ!



絶頂後の脱力に任せて彼に倒れ込むと、がっしりと受け止めてくれた。

太腿を、背中を、頭を、先ほどまでのサディステイックな責めをしてきた男とは思えないほど優しく撫でてくれる。

「お疲れさま……その……よかったです。感謝します。一生の思い出です……ありがとう……ございました」

「私も……はあ……はあ……素敵だったわ……ああ……」

彼の頭の横に頭を置いてうつ伏せで抱擁を行いながら、熱い息を吐きつつセックスの余韻に浸る。

まだ息を整えていない彼の荒い息も、とても満足そうに聞こえた。

ヌプツ……どろおおおお……。

やがてペニスが萎縮して膣内から抜け落ちると、くぱあと開いた秘裂から、ドロドロの精液と愛液の混ざり汁が溢れ出た。

「あんっ……」

満足感まで漏れ出るような切ない感触に、人妻教師が名残惜しげな媚声をそつと吐き出す。

客観的に見ればふしだら極まりない光景だが、誰かに見られているとしても構わないと思いつつ、彼との蜜時の証拠を晒し続けた。

最終話 アリバイ作りのおしかけエッチ

「いつもお疲れ様あなた……背中……流してあげるわね」

教え子とビーチで交わった日の夜。夕食を終えて入浴していた夫を妻が訪ねた。

「夏子……？」

泡塗れになって身体を洗っていた夫が、入室してきた妻をポカンと見つめている。若い頃ならいざ知らず、夫の背中を流しにくるなど忘れるくらいの間していない。妻の珍奇な行動に驚いている風だが、同時に興奮もしていた。

(ああ……勃起してるわ……)

赤黒い亀頭。黒ずんだ竿。彼よりも二回りは劣る肉棒。そんな夫のペニスは泡だらけだったが、一目で分かるくらいに勃起していて、今も膨らみ続けている。

自分の身体を見て興奮しているのだと思うと、嬉しさと気恥ずかしさがこみ上げてくる。

夏子は裸だったが、スクール水着の日焼け跡がクツキリと刻まれており、胴体は白いが手足は褐色になっていた。

夫には競泳水着で学園のプールの監視員をして日に焼けたと説明してある。



褐色と白のコントラストが双方の部位の魅力を引き上げているのに加えて、若い男とのセックスで肌艶が増していることが熟女の身体をいっそう官能的に見せている。恥ずかしそうに頬を赤らめている初々しさや、豊かな髪が揺らめく女性らしさも、夫を興奮させている。

「いや……その……」

「恥ずかしがらないで……ね？」

自分も恥ずかしいのだがそれを我慢し、聞き分けのない弟をあやすように、若い頃に使っていた浴室用の椅子に座らせる。

笑顔を絶やさずにボディソープを手の平にたっぷり塗る。

ヌチャツ、ニチャツ、ヌルルルルツ、ヌロルルルツ。

自分の身体中にも塗りたくる。背中を向けているので夫には見えていないが、そうしている気配は感じているはずだ。落ちつかないげに肩をそわそわさせているのがその証左だろう。

「じつとしていてね」

ピトツ、ムニユリツ、ニユルううう。

膝立ちの状態で、ボディソープ塗れの乳房を夫の背中へ強く押しつけ、そのまま背中を上へ下へと往復する。両手は夫の胸元に回して軽くしがみつく。

胸のソープはやがて泡立ち、胸も背中も泡だらけになる。摩擦感が強くなれば、ボディソープを追加してぬめりを維持する。

「んっ、んっ……んふう……んっ、んっ……」

男の堅い背中を潤滑油塗れの乳房で擦っていると、豊胸の芯がじゅんと甘く痺れてきて、乳首もコリコリになっていく。

口から漏れる小さな呻きに、官能的な熱っぽさが混ざり始めている。

腋の下から見えるペニスは膨張しきってビクンビクン震えており、必死に堪えていくようだが夫の息遣いも乱れてきている。

（……あんなに誘っても断られたのに……やっぱり、こう言う風に強引に迫った方がいいのね）

夫が情欲を高めていることを実感しつつ胸中でひとりごちる。

（でも……私は悪い女だわ……この人と愛し合いたいからこんなことをしているんじゃないんだもの）

何も知らないで妻の奉仕に喜んでいる夫に罪悪感を覚えると共に、自分に嫌悪感を感ずる。

こうしているのは、単なるアリバイ作りなのだ。

他の男に膣内射精させたことで、万一妊娠してしまっても誤魔化せるようにという

ズルイ考えから行っている偽りの愛の営みだった。

「あなた、気持ちいい？」

「あ、ああ………気持ちいいよ………」

本心を明かすのに抵抗があるのだろう、夫は躊躇いがちに言ってくる。

「そう、よかったわ。もっと気持ちよくしてあげる」

乳房で背中を磨きながら、まだソープが残っている利き手で勃起を握り締めた。

（この人に、もっとその気になってもらわなくちゃ）

夫を発情させて妻との性交に及ばせるよう、さらに興奮を高めさせるべく、ソープでぬるぬるの手の平で男性器を扱く。

ニチャツ……又チャ……ニチャニチャニチャニチャ。

初めはゆっくりとだったが、徐々にペースを上げていく。擦り上げるのは根本から先端まで、丸ごと全部だった。

（熱くて硬いわ……けど、やっぱり若いあの子の方が興奮するかも）

夫に悪いとは思いつつも、昼間堪能した若牡ペニスとついつい比較してしまう。

実際に握っている夫のペニスよりも、燃えるように熱く、鉄のように硬く、肉の詰まった量感を感じさせる浮気相手の巨根を強く意識してしまっている。

どうしても目の前のペニスに重ね合わせてしまい、自分は夫ではなく彼の逸物を

扱っていると錯覚するのだった。

そうすると、奉仕する喜びが強くなり、手の平に感じる牡棒の感触がより愛しくなってくる。

「どう？ あなた、気持ちいい？」

肩に顎を乗せ、耳たぶに触れるか触れないかの距離からささやく。一緒に吐き出される吐息は、湯煙の上がる浴室内でも分かるほどに熱く、夫の耳穴の中に吸い込まれていく。

「あ、ああ……」

彼ならば、奉仕してくれるオンナへの感謝を込めて素直に気持ちいいと言ってくれるだろうに、夫はやはり恥ずかしがって控えめに返事をするだけだった。

(もう少し、快感で正気を削っておいた方がいいわね)

夫の胸元に残していた手で、いつの間にか勃起していた乳首を摘んだ。

「っう……！ お、おいつ」

「うふふ、男の人もやつぱり乳首は気持ちいいのね。恥ずかしがらなくていいのよあなた。私たちは夫婦じゃない。こんな風にしても問題なんかないでしょ？」

自分のコリコリ乳首を擦りつけながら乳房でムニュリムニュリと背中を磨き、手の平で勃起ペニスをゆるゆると扱きつつ、硬く膨張した夫の乳首を摘み揉む。

三位一体の刺激を受ける夫の身体が気持ちよさそうに震えている。胸板がピクピク蠢き、脇腹、お尻、太腿が粘っこく痙攣し、何よりペニスが手の平を弾き飛ばしそうな位にビクンビクン脈動している。

「ううっ……お、お前……どこでこんなことを覚えたんだ……？」

このまま射精するのが恥だとも思っているのか、耐えるように腹筋に力を込めながら呻く。

「あなたと愛し合いたくて……あなたにその気になって欲しくて勉強したの……」

牡を欲情させる艶声で囁くと、うなじに唾液たつぷりの舌を這わせ、フェラチオの時にバキュームする具合にぶちゅぶちゅと吸いたてる。

チュパツ、チュツツツパツ、ニチャニチャ、ムニユリムニユムニユ、コリコリツツ、

トロ——ッ。

うなじ、乳首、背中、ペニスを責められ、牡棒は最高潮に膨れ上がり、先走り汁まですり始められた。

温かい室内でも分かるくらいに夫の身体も熱くなっており、背中や肩などからは余分な水気が飛んでいた。

(頃合いね)

立ち上がり、壁に手をつく。

褐色の太腿を開きながらスラリと長い美脚を晒し、日焼けのお陰でビキニバックミたいになっているお尻を上向きに突き出しつつ、秘裂を見せつける体勢を取る。

「ねえ、あなた……入れてよ……あなたの、その逞しいオチンチンで、久しぶりに私を貫いて……ね？」

射精したくてうずうずしているペニスを入れたくなるように、陰部を淫らにくねらせる。

もっと淫猥な台詞を口にすることもできるが、それではやりすぎなので抑えておく。

「あ、ああ……うむ……」

後ろを見れば、夫はソープだらけの勃起ペニスを晒しながら突っ立っていた。

股間の逸物を見れば、どうしたいのかは一目瞭然なのに、まだ恥ずかしかって素直に振る舞えないらしい。夫婦の性交渉がご無沙汰なので、正直に性交するのに抵抗があるのかも知れない。

(これでどう?)

くぱあっ……。

胸元から陰部へ手を伸ばし、精液色のソープを膣内に塗り込む。次いで、人差し指と中指の腹で肉土手を掴むと左右に開いた。夫に丸見えになったバラ色粘膜は、まるで膣内射精された後のように卑猥に塗れ光っている。

「あなた……私はあなたの妻だから私のここはあなたのものでしょ？ だから、オチンチン入れているの……我慢しないでいいの。この中に入ってたっぷり気持ちよくなつて構わないのよ？」

誘うように尻を上下に振る。広げられた陰部では、開き気味の小陰唇がヒクヒク蠢き、包皮を被った陰核がソープの白濁の中でビクついている。

尻が揺れる拍子に愛液が入り口から漏れ、ソープと共に鼠径部に伝い、太腿に垂れ、足の肌を滑り降りていく。

(はああ……早く……入れていいのに……)

夫は卑猥な陰部を凝視しているだけだった。その視線は強く、指で愛撫されている時みたいに触感を感じさせ、膣内をじわっと熱くする。仄甘い痺れも膣内全体に広がっていて、夫をその気にさせるためにしていた尻振りも、しているだけで身体を熱くする快感行為だった。

(ああ……もう、恥ずかしがり屋なんだから……)

埒があかないので、自分で動くことにする。

お尻を向けたまま後ずさりし、股間を広げていた手で夫の勃起ペニスを掴む。

「お、おい………お前………」

「遠慮しないでいいのよ……あなたができないなら、私がしてあげるわね」

クチュリ……。

優しく微笑みながら、亀頭の穂先を淫裂にピタリと当て、お尻を後ろに突き出しながら後ろに進む。

「んんっ………あはあああ………！」

「おおっ………おおおおおお………！」

他の男のモノも啞え込んだ膣肉を拡張しながら、夫の亀頭が奥へと進んでくる。

最近、性交を行っていただけに、膣内は牡棒の進入に敏感だった。毎晩励んでいた往年に勝るとも劣らない吸い付きと締め付けを披露しながら夫のペニスに絡みついている。

愛液とソープで濡らしてただけに、熱くて硬いペニスの挿入快感も格別で、膣内が燃えているように熱くなると同時に、子宮までもが蕩けてしまいそうな位の濃密な快感を感じさせる。

（ああ……気持ちいい……オチンポ、オマンコに入れるのいい……この人のもこんな気持ちになれるなんて……はああ）

やはり、性能差があるので満足感はそのモノに軍配が上がるが、逆レイプ同然で夫と繋がっている倒錯感や、妊娠時の備えとしてセックスしているという不実感、彼と

頼み込んで人妻教師とコスプレH！



(ああ……そんな風に思ってはいけないのに……こういうセックスも……いい……)
快感が膣内を蠢かせ締めまりを強くする。包まれながら締め上げられるペニスは硬さと熱さを上げ、狭窄なぬめり肉筒の中で飛び跳ねるようにビクンビクンと脈動し続けている。

「な、夏子……っ！」

とうとう、夫も我慢できなくなったらしく、日焼けした尻たぶをガツシリ掴み、自分から腰を繰り出してきた。

「あんツ、あなた、やっとその気になってくれたのね」

夫の勢いに身を任せて壁際まで押され、手をつく。

夫婦の身体が安定すると、夫は本格的に性交を始めた。

しきりに妻の名を呼びながら、鼻息を荒らげて腰を前後に振りたくる。

ソープ混じりの夫の下腹が尻たぶに打ちつけられ、褐色の肉房はブルンツ、ブルンツと背中の方へ波打つ。

ジュブツ、ニュジュツ、ジュブブツ、ジュボツ、ジュプンツ！

これまでご無沙汰だったのを取り返すかのように、猛烈な勢いでピストンしてくる。膣の入り口から奥の方までの肉襞の溝をカリ首が何度も擦り上げ、充血して性感が高まっている小陰唇をペニスの根本が研磨するので、膣内を擦られる快感だけでなく、

小陰唇と牡棒が擦れ合う甘美も享受する。

「はあんっ、んくっ、ああ、いいわ、もつと、もつと腰を振って、んふう、お尻をギョツと握って、はああん、オチンチン突き上げてえっ」

（こんなに一生懸命腰を振って……可愛いわ……）

おねだりするように叫ぶものの、愛する夫と情事を行う快感よりも、欲望を抑えていた男が牡らしく振る舞う微笑ましきの方が強かった。

年下の巨根の味を知ってしまっただけに、夫のペニスをどうしても軽く見てしまう。

（私ってば……最低だわ……でも……）

そんな自分に嫌悪感を覚えるが、不貞の心は霧散しない。夫とのこの不誠実な性交を素晴らしいものにして、このセックスをより楽しもうという気持ちがちがどんどん湧いてくる。

（スキモノになっちゃったのかも知れないわね……彼のせい……）

胸中で苦笑いすると、夫におねだりをした。

「はあうん、んはあ……ねえあなた……右足を上げてくれない？ 太腿を持って……うん、そう。鏡を見てみて」

彼に教えられたプレイだ。

防湿処理された壁掛け鑑には、太腿がはしたなく抱えられているお陰で、股間に肉

棒がすっかり収まっている光景が映し出された。

足は日焼けしているのに胴体は普段の白肌である様子が、熟れた女体の卑猥さを増幅させている。

褐色の太腿に挟まれた白い股間が、夫の肉棒を咥え込んで愛液をだらだら垂らしている光景は羞恥心をかき立てるが、同時に胸をドキドキと高鳴らせた。

(私のこの身体……昼間に彼に抱かれて……今はこの人に貫かれてる)

日焼け跡は不倫セックスに耽った証なのだ。

夫の前に入浴して念入りに清めていたとはいえ、他の男とデートに繰り出し、浜辺で性交に耽溺してから数時間しか経過していないのに、その身体で夫と交わっている不貞が身体の芯からゾクゾクさせる愉悦となって全身を炙っている。

自分の不徳やふしだらさを意識するほどムラムラしてきて、よりはしたないセックスをしたくて仕方がなくなってくるのだった。

「よく見て……あなたの逞しいオチンポが、私の日焼けしてないアソコにずっぷり嵌まっているでしょう？ あなたのオチンポを咥え込んで、エッチなお汁をたくさん漏らしているでしょう？ アソコの入り口があなたのオチンポの形に広がって、ビクビク震えているの見てくれている」

衝動のままに卑猥な言葉を口にする。相手が彼ならば思う存分言い放つところだが、

頼み込んで人妻教師とコスプレH！



そこまでしたら欲望に従っている今の夫でもきつと驚いてしまうだろう。だから、萎えさせない程度に欲望を煽る卑語を紡ぐ。

「動いて、動いてあなた。セックスしてるアソコとオチンポの様子を鏡で見ながら、私をいっぱい突いてっ」

ジュポツ、ニジュツ、ジュプツ、ジュップ、ジュップ！

妻に誘われるまま夫は腰を振る。

足を上げているので、肉棒はより深い所まで届くようになっていく。子宮口を叩かせるには、もう少し興奮を高めて子宮を下ろさないといけないが、深い部分で生殖器同士が一体化している心地よさはなかなかで、夫も相当気持ちいいらしく、徐々に腰振りの速度を上げてきている。

夫は鏡をチラチラ見ている。はちきれんばかりに膨張した自分の分身が、妻の愛液でコーティングされてぬらぬらになっている様子や、ペニスの円周に食らいつついて冠状に変わっている大陰唇の姿、小陰唇を巻き込みながら逸物を抜き差ししている情景にも引きつけられているのだろう。

愛液は白い股間から褐色の太腿に伝い、足に沿って滑り落ちている。先ほどよりも濡れぶりは甚だしく、まるで立ったままで用を足しているような有様だった。

「んふっ、あん、いいわ、あなた、あなたのペニス、私のアソコの中で凄くビクビク

してるわよ、はぁンン、それにとっても熱くて、硬くって、若い時よりも素敵だわ」
褒めるように伝えてやると、彼は嬉しそうに何度も頷いた。

妻に牡として賞賛されることで勢いがついたのか、勃起はますます膨れ上がる。

（はぁあ……可愛い……褒められてももっと硬くするなんて……オチンポの出来は彼に及ばないけれど、この人とのセックスもいい……）

夫とのセックス独自の楽しみを一つずつ確認しながら、裏切りの妻は夫婦の情交に身を委ねる。

「あぁン、あぁつ、子宮口に当たってきたわよ、んんっ、奥がズンズン突かれて、子宮にも響いてきて、あふうン、その調子よあなた、もっと奥を感じさせてえ」

そうしている内に子宮口が降りてきて、ようやく夫のペニスでも最奥に届くようになる。

赤熱した亀頭に突かれるのは、例え夫のものだろうとも心地よく、その振動は心地よく子宮を揺らしてくれた。

膣だけでなく子宮もカアツと熱くなり、牡と交尾をしている実感をもたらし、自分がオナナであることを強く思い知らせる。

「あアツ、いいっ、もつと、もつと突いてエツ！」

牡に膣のすべてを征服される快感は、妻の嬌声を獣の叫びじみたものにする。しっ

とりと潤っていた肌に玉の汗が浮かんできて、白肌の胴体をピンク色に変えている。膣の締め付けも強くなっており、夫にしてみればぬめり肉でできた万力でグイグイ締め上げられているようなものだろう。

収縮する膣は細かに振動しているので、バイブレーションを当てられているような振幅快感も上乘せされているはずだった。

「ああ、すごくビクビクしてるう、イキそうなのねあなた、いいわよ、出して出して、いっぱい出してツ、私を妊娠させて！」

何食わぬ顔で淫らに叫ぶ。

目論見通り、膣内射精をさせるよう水を向けたのだ。

何も知らない夫は、牡好きする台詞に獣欲を煽られ、子宮口を執拗且つ小刻みにピストンしている。

膣外射精など考えず、牝穴の最奥で果てることだけを考えた牡の生殖行動だった。

（はあああ、言っちゃった……この人を誘惑して、んあああ、中出しさせようとして……ンンツ！）

自分がいかに罪深いことをしたのかを意識すると罪悪感を覚えるものの、今になって真実を打ち明けて性行為を打ち切ることなどできやしない。

夫に拒絶されることを嫌う心理を自覚すると、自分はまだこの男性を愛しているの

だろうと思える。

しかし同時に、そんな愛夫を裏切り、他の男の子供を妊娠した時の予防策を狡猾に実行しているという背徳感が、彼よりも性能が劣るペニスとの夫婦セックスに蠱惑的な快美感を付加するのだ。

「あなた出して、いっぱい出して私を孕ませてエッ！」

ゾクゾクゾクゾクゾクゾク！

愛する夫の子種をせがむ愛妻を演じる度に背徳快美が背筋を駆け、膣内がドス黒い官能の炎で燃やされるようで、堪らなく刺激的だった。

スクール水着の下に押し込められて日焼けを免れた白い——今は興奮して桜色になっている——乳房はパンパンに張りつめて一回り大きくなっており、熟女の乳首も男の勃起さながらに、ビクビク脈動しながらそそり立っている。

夫に突き上げられ、自分も息を合わせて腰を振る振動で、張りつめた豊胸は上下にブルンブルン弾んでいた。

大きく揺れると表面に浮いた汗の玉が吹き飛ばされ、一緒に甘い牝の体臭も撒き散らされている。

乳房と一緒に舞う豊かな髪は湿り気を帯びており、山の清水みtainな清廉さを放っていた。

「ああッ、ああアアッ、イクッ、あなたあ、は、早く射精してっ、一緒に、一緒にイキましようッ、お風呂場で子作りセックスしてイキましようッ」

力の限り膣を締め上げ、タイミングを合わせて迎え腰を振りながら、不貞の人妻が夫の射精を促す。

子宮口をしつこく突いていた亀頭は、熱く硬くぷっくり膨れ、射精したくて堪らないと言わんばかりにビクンビクン震えていた。

夫が腰を突き出したのと妻がお尻を後ろに突き出したタイミングが重なり、最奥の肉扉に牡肉の穂先が卑猥な水音を立てて嵌まり込んだ刹那、

ビュルルルルルッ！ ドビュッ！ ドグドグッ！

「あはあんああんああアアアアアア！」

数億の子種を積んだ濁液が浮気妻の子宮口で炸裂した。

散々昂らせただけに、夫の精液は若い牡汁に迫る位に熱くネバネバしていた。

密着した子宮口を瞬く間に白濁の海に沈め、その勢いで膣壁の中に染み込んでいく。

「はあんンンッ……出てるっ、いっぱい出てるウウウ！」

ビクビクビクビクビクビクウウッ！

膣内を精液で満たされた刺激が絶頂へのジャンプ台となり、妻も上り詰める。

片手で壁に、反対の手で夫の首にしがみつきながら、太腿を抱えられた状態で総身

を官能的に痙攣させる。

抱えられている足の指がギュツと丸まり、褐色の太腿が寒さに震えるみたいに振幅し、窄まった脇腹や丸く括れた細腰、脂の乗った尻たぶも絶頂の震えを見せていた。「あああ>NNツ、はああ、イツてるっ、私もあなたも、あああ、一緒に、イツてるう、んんっ〜〜！」

厚みの増した牡丹色の唇から、歓喜の恥声を絞り出す。絶頂で呼吸が乱れているせいで抑揚がでたらめだが、男ならば興奮せずにはいられない裏返ったさえずりだった。眉目は苦痛に耐えるようにきゆうつとたわんでおり、実に悩ましい。

「ああ、んんっ……………はあああ……………あ>NN……………」

やがて嬌声を絞り尽くし、絶頂痙攣が収まった頃、夫婦の呼吸も静かになってきた。はしたなく右足を上げられ、鏡に丸映しになった股間では、肉棒をガツシリ啣え込んだ大陰唇が、まるで涎を垂らす口のように愛液と精液の混ざり汁をポタポタ漏らしていた。

「はああああ…………………………」

脱力し、頹れる妻。その様子に、絶頂の余韻に浸っていた夫が声をかけた。

「だ、大丈夫よ……………久しぶりだったからちよつと疲れちゃったの……………」

(久しぶりだなんて……………ああ……………また、私は嘘を重ねて……………)



官能の波がひと段落したからなのか、昼間たっぷり浮気セックスをしていたことを思うと、胸がチクリと痛む気がする。

「ふふ……あなた……まだ元気みたいね……」

膣内の勃起はまだ力を失わずにいた。それを感じ、悪戯っぽく膣を締めてやると夫が気持ちよさそうにうつつと呻く。

「何度でも出して……相談が後になってしまったけれど……子供、そろそろ作ってもいいと思うの……」

罪悪を犯している女にしては、純朴な愛妻らしく微笑んだものと鏡に映った自分を見て思いつつ、媚びた声を出す。

「きて、あなた……」

それが、妻の打算で行われる夫婦の営みの再会の合図となった。

「先生も悪いオンナですね。そうやって、旦那さんの子種汁を搾り取ったわけですか」
誰もいない教室で。

制服の戸部渡と女教師姿の夏子是不倫に励んでいた。

「あんっ、だって、そうしないと、妊娠した時浮気したのがバレちゃうから、あああ



ンンッ！」

黒板に両手をつきながら、子宮口で若牡の突き込みを受け止めている。

彼はスカートを捲り上げ、パンティストッキングの股間部だけを綺麗に裂き、ショーツをずらし、お尻と腰を密着させながら肉棒を抜き差ししていた。

快感を餌に夫との営みを白状させられながら、その時の体位で不倫しているのだ。床には飛び散る愛液のまだら模様ができており、ふたりの汗と体臭が周囲を包み込んでいる。

外に広がる青空と、聞こえてくる蝉の鳴き声、グラウンドで部活に励む運動部員たちの大声が、無人の教室で禁断の情交に耽っている背徳感を煽る。

「もう僕との約束は果たしたのだから、僕に迫られたらそう言って拒絶すればいいのに……こうやってバックから犯されるのを受け入れるなんて、そんなに僕のチンポが忘れられないんですか？」

「ああンン、だって、だって、このチンポの方が熱くて硬くて重くて、ビクビクして気持ちいいんですものッ」

子宮口をズンズンズンズン突かれると、はしたない本音も言わずにはいられなかった。

（はあああ、もう私……この子から離れられない……身体が……若くて逞しいオチン

ポの……この子とのセックスの美味しさを覚えてしまつて……)

肉体の相性だけではない。夫を裏切り若い男と情交に耽る暗い楽しみを貪れるのは、この男子と性交をする時だけなのだ。

「あんっ、ああああ、いくのね、オチンポ、すごく脈打つて……んああああ、お、奥に響くっ」

「出しますよ先生、ピルは飲んでるんですよね……おまけに旦那さんに中出しさせて……僕にいっぱい中出しされたいから、そんなズルイ予防策をとってくれてるんですよね……ふふ、ならお望み通り、オマンコの中に思い切り精液を出してあげますよ」

快楽欲しさに不貞を行っていると思摘されると、罪悪感からくる被虐的な快美で身体が包まれる。

それは身体の芯から腐り落ちそうな位の愉悦で、種汁を搾り尽くすと言わんばかりに膣内が収縮する。

「ほらほら、答えてくださいよ。中出しして欲しいんですか？ 僕の精液をいやらしくて貪欲な人妻教師マンコに注いで欲しいのかどうか、言うんです」

最高潮に膨張した亀頭で子宮口をつつきながら、乱倫の台詞を迫ってくる。

「ああん、はあああ、欲しい、ですっ、若い子の、あなたの精液、出して欲しいっ、んんっ」

「だったら、謝ってくださいよ。何も知らない旦那さんに隠れて、他の男の精液をおねだりしてるんですから」

チュパチュパとうなじを舐め吸いながら囁いてくる。

「はあううう、あ、あなたあ、ご免なさい、若い子と浮気して、ご免なさいっ、あなたでない男の人に中出しされたくて、こっそりピルを飲んだり、あなたを誘惑したりしてご免なさいいいい」

「謝るのはそれだけですか？　中出しされてイク癖がついちやったことは？　若い男とのオマンコで、本気でイッちやうことは謝らなくていいことですか？」

「んあああ、あなたご免なさい、私、きつとまたイッちやうのお、ああん、この子に中出しされると、どうしてもイッちやうから、また、あなたでない男の人の精液を子宮めがけてドクドク注がれてえ、ああん、イクッ、ああっ、イクッ、イクウウウ！　まだ謝りきれないのにイッちやうッ」

子宮口を小刻みに突いている亀頭はすっかり膨らみきっており、最奥の肉壁に高熱を擦り付けながらビクビク震えている。もう、いつ射精してもおかしくはない。

「んんっ…：出しますよ先生、はあっ、イキながら謝ってください、んんんッッッ！
ドクドクドクドクンッッッ！

「はあああんんあああんんウウウウウ！」

膣奥に精液を注入されるや否や、背中を仰け反らせ、ブラウスごと乳房を弾ませる。女教師の満ち足りた嬌声が、教室の空気を揺らした。

「ああイッてるう、ごめんなさい、あなた、やっぱりイッチやったの、くううウウウ！ んはあああ、ごめんなさい、中出しされてえ、イッてごめんなさいツツツ」若い牡は執拗に腰を突き上げながら、ポンプのように肉棒を脈動させつつ、子種汁を吐き出している。

濁液の圧倒的な熱感、重量感が炸裂する度に、人妻教師は極彩色の高みへ飛ばされ、総身をガクガク震わせる。

何も知らない夫へ謝罪の言葉を述べながら、他の男のペニスで達するのもひどく心地よく、病みつきになる中毒性を孕んでいた。

(はあああ……気持ちいい……でも、これからもっと……)

性交の時は嗜虐的な彼だが、行為が終わると優しい青年に戻る。思い切り辱められた後、壊れ物を扱うように可愛がられるのも、この男子との情交を断れなくする快樂だった。

(ああ……はあああ……)

このような爛れた関係がいつまで続くかは分からない。

血液型を確認していないので、浮気妊娠を誤魔化せないこともありえる。

頼み込んで人妻教師とコスプレH！



綱渡りみたいな状況だが、背徳の味を占めた浮気人妻教師はなかなか精算できないでいた。

(こんなことはいけないのにやめられない……ああ……私……こんなに弱くなつて……墮落してしまった……)

胸中でひとりごちるものの、それも被虐的な背徳快美にくべられる薪でしかない。

「はあっ………」

膣にたっぷり精液を注がれた後に漏らした吐息は、後悔や罪悪感に苛まれる女のものではなく、性交に満足した牝のそれだった。

そんな自分を、性器同士で繋がったまま、若牝が優しく抱き締めた。

ふたりで上体を起こすと、彼は額やうなじに張り付いた髪の毛をそつと掻き上げる。くすぐったさを感じながら紅潮した頬を近づけて唇を重ね、夏子は後戯めいたスキンシップを楽しむのだった。

終